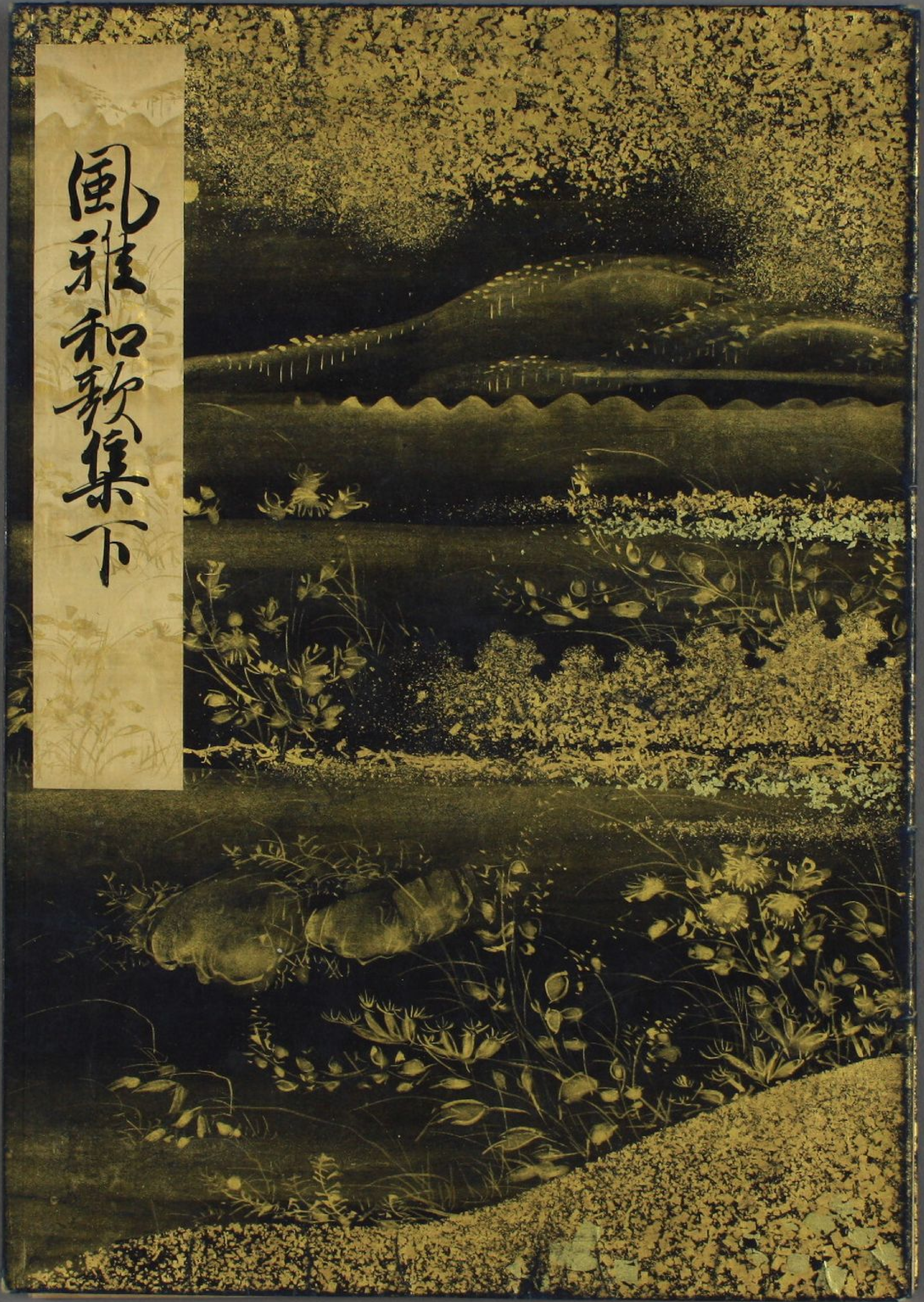
風雅和歌集　下



九曜文庫

風雅和歌集巻第十五

雑哥上

年のはしめに人のもとへつかはしける
ところせく　中納言為輔
わかしらぬ身の初の春はきたれとも人はこちたつかぬかな
春生人の中にとふへきを　左京大夫顕輔
春きぬとおもひつる心のかすみにもそれとも見えけり（けらし）
題しらす　大江頼重
みすまてはうめときえやしつゝあるの鳥羽山松にかゝりつゝ
ことしにそみなしけるかな　永福門院内侍
思ふまにわかみの山そきりもやへいさやとみん
正月一日鶯のなきけれは　清原元輔
年ことに春のくる宿なれは鶯の声もまさりてきこゆ（ゆれ）
題しらす　慈寛国師
我宿をとふ人にはつかへり春たちて庭のおもの雪の村きえ
たえぬ家へあそさりける百年の中に
納雪を　前大納言為家

なをつもるとみえけて神山の玉くしのはにかゝる白雲

題しらす　平重時朝臣

初草は下にもえしとも雪のしたにきえかへりの春はきえけに

澄信朝臣従五位上にて年へ侍けるに一級

とゆるし侍りて侍ける時よみてつかはし

けり　清輔朝臣

位山むもれてかれつる苔のしたにも春風よとけにふえしかも

返し　藤原澄信朝臣

位山まちえてうれしき苔のしたゆくとふかくそてもしつるかな

春の哥とて　大中臣忠宣

雲の内そとの梅はみえそめしかとまつ春告る鶯の声

あるしかはりて後左京業平朝臣家の梅

とほるとてうつさむとて侍るをとゝめ侍れは

てつかはしける　前大僧正花寛

世につてもあるしはかはりぬる春や昔の宿の梅かえ

定家てもやしまみけるに家よりまち

へてみえかへりける侍るを折りのこして

うへて侍る梅の木の枝に結ひつけ侍る

永福門院

三重の宿は昔にかはりてかはらぬ軒よ白梅かえ

返し　前大納言為世

ちらぬまの梅のえたをみるからにさき春を知らし

春哥とて　藤原教兼朝臣

春風のなのみにさそふ花つまは梅か香ひかをり

平久時

鶯の梅の匂ひを媒にて我園ちかくかよふ春風

伏見院かくれさせ給ふ時出家し侍て後梅の花をみて

前参議家親

梅のはなうつり匂ひもかはらねとおもはぬ世よりすみ染の袖

春の御哥の中に　伏見院御哥

霞にもしられぬ松のまにかけてやかすむらんたかさこの春なるらよ

遠山霞といふことをよませ給ける

院御哥

霞あへぬ夕日の空はかすみつゝ雲にそあらむ山の端の雲

嵯峨殿にてよませ給ひける百首哥の中に

山霞を　皇太后宮大夫俊成

立かへり昔の春の空しさは霞をみけしかすみのゆふ

海辺霞　権中納言長方

よるの海すみれてまろ波のた沖漕舟の行末もとほし

春のころ天王寺へまいりてよみ侍ける

寂然法師

心ありてみるともあかし難波江の春のけしきは行くともなし

春曙を

九条左大臣女

しらみゆく霞のうへの横雲に有明ほそき山のはの空

源頼春

春のよの霞もふかき山のはにおつともなき有明の月

従二位為子

春の夜のやゝ明かた山のはに霞なりて雲そわかるゝ

左大将に侍ける時家に六百番歌合し

侍けるに春曙をよめる

後京極摂政太政大臣

みぬ世まて思ひのこさぬなかめより昔に霞む春の曙

前大僧正慈鎮

思ひあかしなかめにつきて人よのこま春乃明ほの

三十首歌の中に

前中納言定家

いふとも誰にのこしてなかめけん心にあまる春の明ほの

題しらす

前大納言為兼

峯ねよそになるゝ梢へさえ残らすめる末の春のあけほの

伏見院にて人々題をさくりて歌たてまつり

けりつゝくに水郷春望

後鳥羽院御哥

後鳥羽院御所の西の面に未明てうすまゐりて春風を

文保三年後宇多院によませられける百首

哥の中に

民部卿為藤

世ゝ分つゝ宮まにみえそめてりえそやねよの芝草

百首哥よませ侍ける中に蕨を

安嘉門院四条

今は世にありてかひなき身の程を野への蕨のおりくそしらす

前中納言定家

霞の山岸の下蕨これやおりしる宮ともなし

従二位家隆

春たちぬ谷の昔に帰る道あれとも春におもほえ

権律師慈成

春草につもるわらさ器の上にて重ね雑子鳴

百首哥の中に

前中納言為定家

思ひ見よみちの志かやふる高ふるさと山人よ何そ之

延喜太皇太后宮より紅梅をたてまつりて

侍けるにつかさの年の春花の咲らみよゝ

てをりくるらをせけるにむまをひ清き侍りけ

読人しらす
うへしおきしあるしもしらぬ梅なれはもとの君にそわきてなきけれ
返し　前参議経盛
うつしうゑし宿の梅とも見えぬかなこゝにそもとは咲ける
大江挙周つかさめしにもれてなけき侍ける
ころ梅花をよみて　赤染衛門
思ふ事春とも身にはおもほえぬに時しりかほに咲る花かな
除目の比梅につけてたてまつりける
大蔵卿資宗
くらゐ山春まつ梅は咲くよを悔とへんとくこりか我身か
御返し　崇徳院御製
八重梅もいろ雅をたのまるゝ老木も春にあひぬるは
後山本前太政大臣に時経て侍り
けるに法の筵につかはしける
前大納言為兼
時にあはぬ君か春とやひらくらん花のえたをも梅にうつらん
返し　後山本前太政大臣
思ひやれ君かめくみは時にあはて身にあまりある花の光を
法勝寺にて人々に花十首歌よみ侍りけるに
皇太后宮大夫俊成

花よりもそつかはさえなは山桜あかりをはらぬ霞となるらん

返しらず　前大僧正公朝

見つゝ花は限りもなかりき春日山ふかくも分る雲

百くさの年しし時春哉

覚誉法親王

吉野山花のためにも見やまさしかねをもさそふ

春述懐の心を　伏見院御歌

[illegible]

前中納言為相

[illegible]

山家春といふことを

権僧正憲淳

時しあれは鶯もなきけるをかりふかくたつぬ春の山里

たやすくもこゝみ待春のまよ人のうつりかはらく

のちの花をわすれよやはとてよめる

伊勢

花の色は昔ながらにみえつれど人の宿ともおもほえぬかな

上東門院上人白河にまかりて侍りけるにもてあそひなれし女のゆまふにさそひて花見にまかりけるに

行とさせけり

藤原雅経

花ゆへにみゆきなれにしにふるとしといひや出る白河の水

式子内親王斎院に侍らせらるゝみちのくにも
とをりて建礼門院右京大夫のもとにつかはし
侍るとて　中将

さそはれし月をもとめてさかす桜花折ふしとをかしにほはせて

返し　建礼門院右京大夫

志あるかたもいかん花はみな神に通はせてちらさるを

春風中に　祭主定忠

春風の岩ねの桜吹てこそ浪のもちろあさくま見ゆ

二条院御時いまた殿上ゆるされさりしと
なけき侍りけるころやよひの十日ころ大内に
まゐりて南殿の桜さかりなるを一枝
折らせてこそとおもしにいてとお
かさらせけるに枝にむすひつけて侍りける

従三位頼政

よそにのみこふる雲井の花もけふよりは南殿にてみてそわかぬ
あかし此時藤原隆信朝臣殿上のそうまて
て侍りつきの年の春臨時祭の舞人
にくはゝり侍るに南殿の桜の咲たるに
まけの枝に付て遣すとてなむ雲井の桜も

うき身は春のよそになるとも心せ女房の中
より申て給ける返し

読人しらず

忘れじよ月こそ雲ゐのよそならめなれしむかしを忘れやはせし

おなじ院かくれ給ひてのち南殿のさ
くらとて

参川内侍

思ひきや雲ゐの桜もみし人我とありきを

文保三年後宇多院にたてまつりける百
首歌の中に

権中納言公雄

忘れめや昔みし世の桜花今は雲ゐのよそに見えけり

永仁二年三月大江貞秀蔵人よりかはりて
叙爵しけるとて宗秀がもとにつかはし
ける

前大納言為兼

めづらしきみどりの袖も雲の上の花によそふ春の一しほ

花の歌の中に

皇太后宮大夫俊成

むかし来と花になれてし山桜おしむむかしのことをも恋し

出家の後寄花恋といふことを

従二位兼行

袖の色は昔にかへてそれぞれもみまたる昔の花を

寛治百首歌の中に見花といふことを

皇太后宮大夫俊成女

あはれとも思ひてとはし奥山のかすみにわひぬ独すみをと

春哥に　法印長舜

世のうさはいつくもよそにしはなはしや吉野のおくも猶うし

なちの山に花山院の御庵室のありける

まへにさくらの木の侍るをみてよみ侍る

此よにはすみける人の世を思ひ出てくる

けり　西行法師

木のもとにすみけむあとをみつるかなゝちの高ねの花をたつねて

花の哥の中に　従三位氏成

こゝちあまり老か身にそ思ふかくねはんこそあり

家后の御かたにさふらひける法皇宣光門院新

大納言の御局へ申侍りし哥

永福門院内侍

まことに身は七そちに老ふりてもとしや花をみつ

これをとらんして御返し

院御哥

人も身も老ぬる花をさそふ世にすむ雲ゐを浦やましき

寄花述懐の心を

伏見院御哥

咲出る一木の桜は世にしられさりし花の春を移しつ

暦応二年乃春花によせて祝の心を人〻によませ

侍けり　永福門院

時しらぬ宿乃軒はの花さかり君にとはるゝ春の人たまへとそ

御返し　院御製

春をしるみ山かくれの花なれは世にしらぬ花の浪をとまりて

花乃いとたかしろきとこそ

和泉式部

あちきなく春は命のをしきかな花そこの世のほたし

なりけり

如澤法師

風ふきははたえぬ庭の岩こえて波の門をもたちの白浪

源貞行

山ふかくあとをたけ入くる道は風よりさきに花を尋ね

源貞世

ちるをたにせめて袖に吹とめよ花そことなき風の情と思はん

平親清女

散まてに人もとひこぬ木の本は梢やちりの花の白雪

帰鴈をよめる　源和義

玉つさもとつてはまよ春の鴈わかれてにゝると思ふ

春雨　源貞泰

はかなさハ昔よりなをまさりけり秋月ふりゆく宿の春霞

春哥に　　源高国

春とハ暮にくらすしら老の杖にやとる月をも

百首哥の中に春月

従二位家隆

おほろなる昔の影ハなかりけり年あけてみる春の夜の月

おなし心を　　土御門院御哥

時しらぬ涙に袖ハおりなまてかゝむとしらぬ春の夜の月

後京極摂政左大臣に侍りける時家に六百番哥合し侍りけるに遅日とよめる

藤原隆信朝臣

くれはつる一日ハまつの春の日をのとけき枕と待し心ん

春哥とて　　殷富門院

ふるさとのなさけよこれも夏まてや花鶯の一時の春

山階入道左大臣家十首哥に松藤と

山階入道左大臣

色かへぬ松をも木さへ春の池よみ庭けて匂ふ藤浪

おなし心を　　前大僧正實超

庭清き池の汀ハ松かえにかけてなひく春の藤浪

春哥の中に　　前太政大臣女

山吹の花ちるみつ(?)の春はゆるぬれそのゝ玉川

この春はかつすくとてもなくて花みる人はさほし
かとや待人のやよひのそらまてとや
待けるかな　永陽門院左京大夫

なくさめし花のむかしもおもほえすとまりせまても春そ暮ぬる

雜歌の中に　前大僧正慈鎮

何となく心ほそきはさゝかにの軒よりいとゝひく人もなき

百首歌よみ侍けるに

深心院関白前左大臣

東屋のまやの軒はに露あまりて霜おきさそむ袖の秋風

題しらず　従三位氏久

見ぬ世まて末にゆくて見し比叡山のみねをみるにつけてもむかしをそ思ふ

郭公を　高階重成

数ならぬ身はましらさりしの初音をもなくき山路をたつねてそきく

三善為連

あふ事をまつほとすきの初音さへつらき人にしられけるかは

菅原朝元

時鳥鳴へき比とおもふより雲になかめのあかれぬるかな

前大僧正忠源

待えても老はいく世の郭公なかなかにきかぬをかたらふにそきく

在原行朝臣

ほとゝきすこゑのひねなくめかるゝきゝ西来ぬ雲にゝ鳴らん

藤原高経

天雲にはねうちかはしのかるよそになきてゆくらし

権中納言宗経

鵜入乃山のくれの郭公ささ世にかくれとかたらん

右大将兼長

けふ程のいさゝ世ゆくかくまはゆきて待かれ

そむく来ふくゝはまて待けむに補鬼車

ともみふをひしくふるへりきてまたまつ車

よりかくさそ五月雨よりこしせく

待けり

読人不知

棹ちなぬ袖に月影のいろをみてこそくりなかく

世をそむきてのちあやめをみてよめる

従三位宮子

きふとてもあやめのへさ男のねふなふかきそやとのなくらん

従二位兼子女

橘のかほりをしのふ風もちてあやなく人のたつるさをなる

早苗を

祝部成賢

夕されてそふそいそけ早苗とるみしかき田のあきのたみ人

安陪宗長朝臣

松かけのあさいまて住吉乃岸のうへ田にさ苗とる也

五月雨を　藤原教兼朝臣

晴まなくふりくらしたるひとひやそらもなくて五月雨の比

津守国夏

みたれて茂るはみえぬ五月雨にうきさへ朽まさる淀のまこもを

高階重茂

かさそまふくらふ如ぬおきまよふたゝの浦乃五月雨の比

夏哥よ　源顕氏

いまのまも中に立をそし足引乃山のはそくれ雲の一むら

野夕立　惟宗光吉朝臣

野のねは晴行空におちまそてまちれぬるそうつ夕立の雲

五十首御哥の中に夏草　伏見院御哥

夏草はしたしをれ伏よるそさきれて心の末はなひきとそしく

山家晩涼といふ事を　前参議雅有

夕すゝくそとものまさき風たちて夏をわするゝ山の夕陰

夏哥の中に　読人しらす

急雨はすきゆく跡の山かけに露ふきおとす風のすゝしさ

源貞頼

山かけは日影をよそにねこほりの水はかはりて夜はすゝしきまね

題しらず　　儀子内親王

秋近くなりまさりてはよみか月の影もすゝしきは夏の野

述懐百首歌の中にとりしと　　皇太后宮大夫俊成

ますらをは志つまりふもとあまたの歌も亜ゆきもなめ

小壁ちよるみてさつりけり百首歌に　　前大納言為家

さ月やみとりしふもとの廉はりおもをかなも寂世中

題しらず　　従二位基輔

蝉ちるを葉のしけみに風過て夕日涼しき杉の下陰

大江貞懐

こゝをせく岩ねの清水庭清くつゝく緑の色そ涼しき

藤原秀治

一村の雲吹さそふ山風に晴てもすゝし中空の紅

惟宗光吉朝臣

山かけは窓の蛍も月とてもせかつもる人の梢かな涼し

貞宣上人

岩まつてふ宿の涼も月はうつて心をあらふ廉の涼しさ

河原院にて法橋顕昭歌合し侍りけるに庭
のなでしこ水にうつるといふことを

藤原隆信朝臣

うつしうゑしまがきは野べとおもひて浅茅が末にほふとこ夏

七月七日亀山院より七夕の歌めされける時
よみ侍りける

後西園寺入道前太政大臣

昔今袖のしづくをかさねてぞしるとぞしりつ草葉の上の露
おもひしられよ

藤原秀能

天川とわたる舟のみなれはたゞ一夜とかたく契りけん

高階師冬

初秋はまだしらぬよのあはれはおもひやられき星合のそら

寧世間安穏一身平といふことを

慶政上人

ゆふ月ともろこしの秋風にかさねかさね袖の白露
おもしらず

兼好法師

しられじな夕の露にかきやそふ庭の小萩の末そよぐかぜ

式部卿久明親王

大かたの秋のならひとしりながらなほ夕暮の山の端の雲

大江貞廣

物ごとにちらせる衣はこはならしさてそのまゝに秋の夕暮

和氣全成朝臣

日影おつる籬の草に鳴そめてゆふへをいそくきりきりすかな

前權僧正円伊

なれそこく老乃枕の蟲なりん後の衣をもとく人

賀茂重保

夕まくれさをしか鳴聲の風のたよりにとほくもちかく聞ゆなるかな

秋述懐といふことを

前中納言為相

老日聲に蟲なく麻をとふ人も世にすみしも後まてみそ
秋の夜あまりしよまの世語けるに

順徳院御哥

麻の葉を入あひのかねに吹まぜてかつま遠き嶺乃松嵐

伏見院御哥

田家の心を

あさかなる門田の末は山遠くていなばにかかる入日をそみる

あきさをとよめる

貫之

松のねを琴にしらふる秋風は瀧の糸をやすけてひくらん

秋哥の中に

後京極攝政太政大臣

水あをきふもとの入江の霧はれて山路秋なる雲のかけはし

權少僧都円為

入日さすすそのゝすゝきうちなひく松原より吹くる秋の初風

百首奉りし時　前大納言為氏

秋風にうちゆく雲は海よりもとものこはるゝ夜半の一むら

題しらす　藤原教清朝臣

まよひそむる霧乃絶間もひまみえて山のをわたる雁の一つら

藤原宗秀

わけ出る秋のいる日は雲まより山をとみて海の路こそ

秋雨を　中臣祐夏

嵐吹高ねの空は雲晴てふりとゝめくる杉の村雨

題不知　平英時

はしさはわかその萩に音よりも桐乃葉おつる庭に秋そしる

明道法師

空はまたかつ日影のこす雲に霧みえそめて庭そ暮ゆく

藤原宗泰

須磨の浦や波路乃末は雲きえて夕日にかゝる淡路島山

前大納言為氏

松風に月の前のへは空晴て雲にかゝりしさえゆく秋かせ

後宇多院七夕七百首奉りける時駒迎を

権中納言公雄

いさもうも絶ぬるまでのをりみえて秋乃あかつきのちる月の駒

おなし七百首奉りに湖月を

従二位為親

ゆく波やまかせて浦の塩風にはらふ雲晴て月そさやけき

月前旅中に　前大納言為氏

まち出し山の端に月はふけてそ泊りのそのの都そ更行

津守国実

旅寝には詠よとてや秋の月見て都は行へもしらさらん

賀茂経久

故郷は都ははるかに遠の末なれて行人月の影たのもしき

藤原為守女

こよひは月まちえて行秋の旅ねまくら花のとまりよ

藤原懐通朝臣

雲の上に今宵もしるき月そ忍ふ我世を老行塩の海よ

和気経成朝臣

思ひ出る昔にかはる月影そ猶かはらしと鏡なりけり

丹波長典朝臣

月ならはまたへたてゝ行むかしとてみる月や妹とともに老と成ぬ

清水源全

年ことに逢みるも今宵老の数そふ秋のよは月

貞永元年八月十日ころ中宮の女房い

さそひて東山へまかり侍しよ月の

うつりてくまなかりけれは

光明峯寺入道前摂政左大臣

世をいとふ墨染の衣のそての宿る月と袖にみつかれ

返し

後堀河院民部卿典侍

立かへる袖にも月のさしてふかき墨染の衣におなしいろかな

護持僧にて侍りけるころ月をみて

二品法親王尊胤

わきてこそつかふる君の秋をやつれてみる世の雲の上の月

百首哥奉し時

入道二品親王尊円

くもなくそみつへかりける奥山のむろのとほそにもる月影

雑哥の中に

儀子内親王

宮こさへさしての月は影すみて木たかき秋はまつらめや

丹波忠守朝臣

秋をこそまた明のそらに一しほにかるる月のなさけは

山家月と

恵助法親王

いとひこし世のうき山里は月はいつくもみなれてまさん

世をのかれてはあつまにすみ侍りけるころ

よみつ

藤原為守

住なれし都の出しことし九月にはまつる里の秋

題しらす　法印澄覚

なかそみる月そあらんとつるかなしきの秋のよは

延喜五年内裏の御屏風月夜に女の

家によそこいまさりてのこふかそねいまさせ

あまの原　貫之

山のはにいりなんとする月みてわれはとなりしかりんをやまう

女のへし

久堅の月のあかりにさそはれてぬるおしとそ思

たりふるすきけるかな

寂然法師

はるとそとしとそなきこていこよひの月よそはれかり

こりそめて待けるる月とみんとく

右京大夫重家

月前述懐と

月影のうきまにもうき人のみやそのそれはそあはめ

俊恵法師

なかむれはうきよのあはれをいとゝやしけきや月にみん

月の旅宿中に

右御門院御弁

歎くとて袖の露をは誰かとまる秋のよの月

従二位家隆

昔よりいとはかゝぬ袖の上に誰とそ月のやとりけん

月十五夜哥よみてたてまつらせ給けるに

雑月を　伏見院御哥

夜ふけてもなほのすさひはあはれにて我よの月に影をまさらん

寄月雑といふことをよませ給ける

院御哥

雲ふかきみやまのおくにすむ月の世中に影やあまくたるらん

題しらす　四条太皇太后宮大夫

跡つけし思捨ても世中に又わけまよふ山のはの月

賀茂雅久

あちこちの旅のそらにてさととおもひしれぬ家もなき

雑哥の中に　前権僧正慈勝

あまたたひ庭のくれかゝる苔の上にふりてこそとひくる人もあれ

紅葉を　祝部成国

一しほにいそめてたにもそめてあり時雨にそみし山の紅葉

秋哥に　慈空上人

うつろふもはかなき木の夕附日うつしそめける嶺の松かな

叢林乃心を　大江千里

山はいまた秋をかさねてつもるともまた木の葉さそふ嵐に

秋乃色を思ひつくしても今日しくれてそふに

十月一日よめる　和泉式部

きえはてゝとひまそなけきこそのよ河音にちいはつとせと

題しらす　藤原冬彬

夕たちは雲一村よをこえて河音にすむ嵐の松かせ

祝部成国

かきくもり板屋の軒の河音そて冴る月に嵐の木すゑかな

落葉交雨といふことを

前大僧正賢俊

神無月時雨にましる落葉はちりつる程も色やそふらん

冬哥の中に　二品法親王尊胤

落葉にも杜の下みちあともなしや又ふきかゝる木枯の風

閑居冬夕と　従二位為子

なかめやる桐のおち葉は風におちて人は音せぬ宿の夕暮

風前落葉といふことをよませ給ける

後伏見院御哥

山おろしにふりくるおち葉みちる葉の色をしめぬ世のあきそ花

神無月のころ浄尾入道前関白のもとより

山中に何する人とやつかへして待まほし

冬すむにふるみゆくあそしけり

慶政上人

なかめやる嵯峨のふもとも落葉そめ冬にうつる宿の梢に

題しらす　守子内親王

影さよえて夕日うつろふ置露にみたれもあへぬすゝきむら薄

藤原高範

風ふけはもとの荻原冬枯もさそひそめけむ秋のなこりを

百首歌よみ侍りける中に冬を　安嘉門院四条

むすひ置し冬の草の花の枯はてゝ霜にやとれる露もはかなきや

江寒蘆　読人しらす

みなと江のあしまにさはる蘆の葉に夕霜さむき浦風そ吹

冬月をよめる　前権僧正公什

はれくもる霜よの空の冬かせにはらはれにさえまさる月の影哉

題しらす　法印[illegible]

ふきしほるとみえは風のたえてたにかれをかやまく雲の空

冬哥の中に　贈従二位清子

空にのみちりかゝりてきえぬるは日をよそにふる雪にやあらん

浦雪を　惟宗忠貞

難波かた汀の雪はのこれともきえてそ波にさやかなるらん

文保三年後宇多院にたてまつりける百首歌の中に　権中納言公雄

庵むすふ山ちの雪をふみわけてとふ月ならてかへる人なし

後伏見院小山亭に御幸ありて人々哥
よませられける時雲を
今出河入道前右大臣
しら雲は海ちとをまされも君か為つくらぬ深山の山里
おなし心を
法印貴懐
君か代はおなし御代よふる雲は昔の跡そ残りける
藤原為重朝臣
嵐ふきてもなと絶さ梢は雲にのこれ花の梢も
後照念院前関白太政大臣
嶺にかゝる跡もなし世にふる雲ハたえそたになる闇の白雲

冬哥の中に　太上天皇
ふりつむ雪に日数はたえぬの庵むすひて末葉の山陰の郷
順徳院御哥
千鳥鳴よはの山風さえてや河音たかく明ぬこの夜は
前権僧正澄勝
さゆる夜の入海かけて友千鳥月にとわたるあまの橋立
後宇多院七夕七百首哥に浦千鳥を
前中納言有忠
しほ風にあとありて浦千鳥あかつきをまたれねとのこゝろは
おなし心を
紀行春

おつまんとこそ志てまね濱千鳥かくしのと忘れて

冬歌に　前京成藤

こかまてとおもひのこすみる世ハ下にやみありてしらん

藤原基雄

山河乃岩まにおつるみち葉の下になかれけるかすむかな

堀河院百首の歌に炭竈を　俊頼朝臣

すみかまのけふりたえせぬ世中を心ほそくもおもひあかす哉

爐火

いふせくもはひの下なる埋火のかくれつゝ身そのとこさねつきみと

歳暮を　前権僧正静仲

老となる数ハ我身にとゝまりてやくとも思ふ年ハくれけり

おなしこゝろを　前権僧正雲雅

身のうへにつもる月日を積て老乃数そふくれそかなしき

冬歌の中に　兵部卿覚助親王

行末をしふにつくしてむへらぬ身にハたゝ打さき年か

歳暮の歌とてよめる　前中納言為相

今ハとて志ふかりつるのくれ暮家いつまて春を待らん

世をそむきて後山里にてよみ侍りける

くまもなくいかりつきへのみちを推史とものの
いそかしけにもられけるは

藤原為基朝臣

山人の都をはいそくすみ出てや年のくれをすくすらん

百首歌たてまつりし時冬歌

永福門院内侍

ことしはや又いくとせの老なるらんこゆへきおとしの
暮をつまし

風雅和歌集巻第十六

雑歌中

暁雲といふ事を

藤原為基朝臣

暁やまふかくしらむ松のまにわかるともなき峯の白雲

文保三年百首歌めしける中に

後西園寺入道前太政大臣

見るまゝにおほかる星そかくれゆく暁やみのむら雲の空

百首歌たてまつりし時

左近中将忠季

時はやゝ曉ちかく成ぬなりまれなるかりの空そしらるゝ

雜哥乃中に　今上御哥

みの空は星みえて在明の月よりしらむ峯のは

康永二年哥合に雜色

院一条

しつみはつる空のみとりはうすみえて明ぬる星そ影そ近き

曉乃心を

祝子内親王

山のはにわかるゝ雲は明やらて峯よりしらむ曉乃そら

雜哥乃中に

太上天皇

秋の夜のすゑなる月の梢より明おちて月しつかなる曉のやま

鐘のおとに夢はさめぬる後もなほしはしさひしき曉のとこ

従二位親子

窓ちかき竹の葉は明そめて音よりのかる曉乃雲

進子内親王

こゑきくるおもしこさもきるや嵐のちる曉のそら

春宮権大夫公道

明ぬるかねやの窓のひまみえてかすかになりぬよはのともし火

百首哥の中に

院御哥

明わたるそらに雁の一こゑに影しらむ空は雲明る也

徽安門院一条

立そむるからす一声鳴て林静かにあくるしのゝめ

前大納言実明女

あさ鳥の急く塒の枝の梢しも月はいまふかき夜明のけしきとさくりてくるしはまゝりきゝに

聞といふことをよませ給ひける

伏見院御哥

杉坂や暁をきて鳴鳥の声よりしらむ窓の松むら

百首御哥に

院御哥

里くの明ぬかたゝいそけれとのとかにしらむ山のはの空

題しらす

藤原為基朝臣

出やらて朝日こもれる山のはのあたりの雲そ光匂ひぬる

朝烟と

従二位為子

やとくに急く烟の色ふかし一村すゝむ里の朝明

百首哥の時

徽安門院一条

遠方の里ハ朝日にかすみて烟ならすき竹の一むら

前大納言実明女

風になひく竹のさ枝に附日うつりさしぬ軒そさひし

あさけ夕といふことを

前大納言為兼

しらつゆの苔よりうつる日影みえて峯もふりしも松の夕色

雑御歌に　順徳院御製

入日さす峯のうき雲あらはれてひかりにつゝむ一むら

今上天皇

夕日影田面はるかにとふ鷺のつはさの外に山そくれぬる（ゆく）

栄子内親王

山もとはまつくれそめて峯たかき梢にのこる日影かな

夕山といふ事を　後伏見院御製

夕山やむらの梢はくれそめてのこる日影そ嶺にまれなる（あかき）

百首歌の中に　中務卿宗尊親王

見るまゝに雲まの日影うつろひて村々かはる山の色かな

雑歌に　厳安門院

夕日さす峯はみとりにあらはれてかけなる山そまつくれ行（こゝき）

百首歌奉りし時　左近中将忠季

夕附日入ぬる峯のいろこそれよりもあかきて松そひかりき

百首御歌の中に　順徳院御製

ゆふ附日山のあなたになりぬまに雲のはたてそなほ残りけり

雑歌に　院一條

山のはにかゝる雲にまかひきて入日のなかれそ空にみえける

徽安門院一條

夏の空は夕日の影はきえやらて月よりくもる雲はしかれ

源義詮朝臣

月は猶またしと浦ゝ暮やらぬ空なれやらぬ影ともすれは庭の繁

従二位行家

人とはぬ宮わらやのしつまれは雲そ今はさゆる夕暮の山

暮山とよめる　前大納言為氏

山せはたかの松よ秋やそ夕の雲そ昔にしつまる

百首哥奉りし時　民部卿為定

こよひ川のをちかたひゝき吹ならて松しふくりか入逢のかね

前中納言重資

あそく松のしつくはおちそひく雲ふくむ夕暮の山

題しらす　後伏見院御哥

鳥乃ゆく夕の空よはるゝとなかめの末小山そ色こき

藤原為基朝臣

とひつれて空をはなれゆく鳥そにくゝ色そふ暮の遠山

夕鐘と　伏見院御哥

鐘のをとをさそふ嵐に吹こめて夕暮しるき野への松かせ

なかひく河松のおりそは静にて嵐乃おとにのこるかね

山のはにわかるゝ夕暮にさそひて雪ゆく入逢のかね

祝子内親王

つましかなくてくるゝ日の入相の鐘のおとそさひしき

雑御哥の中に　後伏見院御哥

見る人もちる花を惜むは人をおもはす人の風は嵐そふけ

永福門院

くれてそ残る色遠山の峯に入日の跡より秋の雲かく

従二位為子

なかなかになかめの空をみるまゝにおもひこきまてあはれそやまさる

後鳥羽院御哥

何となく過にし方のなかめまてこよひそ月に

伏見院御哥

寺ふかき花の山路をせく鐘の聲の響に

儀子内親王

沈ゆく我のこゝろの鳴さしてやむしさへ月ひるくしこそ

みる人の心をみむはむなしく玉ひろて雨に世は静なり

燈をよみ侍ける　従一位教良女

思ひけむにいつか月もおもへり影なきねやの灯

寛治百首哥に夜燈を

前大納言為家

衰へて月にそむくる灯のかけと（りイ）なる我世ふけゆく

雑哥に　前大納言長雅

枯のやれひま吹風もしのはるゝ宿に秋をはつ灯
影と　厳安門院

灯はおほ秋の窓によそすみにく影の軒をと枕まそこく
月を　後伏見院御哥

一とちふとひしまに猶もみつ世の世をとも月ハそこまされ
よみ人しらす

世中はむかしを捨ておもふとそのこゝろ月はみちかけ
月のあつさを見てよめる　大僧正

おもひよふめくる身としともなく月ハ昔のかけそすまし
遊人ありて後月を見てよめる　藤原敦経卿

昔のことおもひかへしにあかしさハあれ雲なる月やあかるん
しかおろして後月をとりて　前参議家親

今はまた見ることゝ衰へゆく世こそたくひうき雲の上の月
雑哥の中に　如願法師

袖の上にやとる月のかけあかりし昔の影を忘れつゝ
何となく昔恋しき秋袖のなみたにうつるやとる風影

従二位為子

時ありて花も紅葉も一さかり哀に月のいつもかはらぬ

大峯籠りの時よみ侍ける

二品法親王覚助

うきて行雲吹まよふ山かせのをちにたえたる峯をさしけれ

雲を

永福門院

山あひにおりしつまれる白雲のしはしとみれははや移りけり

前大僧正慈基

うすくこそ山の色とはみえけれは空行雲の影そうつろふ

雑哥の中に

前大納言為兼

あらしにおちてたえたるむら雲のたえまにつちあらふ雨そゝくなり

従二位為子

ねさめしてやまぬ軒端の雨のおとにせめては又もきこゆなり

百首哥奉し時雑哥

入道二品親王法守

枝たれる梢に雨のをとしきてまよふ霧おちぬ桂の下影

五首哥合に雑遠近を

太上天皇

雲のゐる遠き山松はみえかねてまよふ霧の行に雨こほるなり

永福門院内侍

なかつ葉のへりをめくりて山のたかさゆへ夕暮の雨

雨秋思と云ことを　後伏見院御哥

秋あらしよりのこひはさてあぬ雨にぬれつゝくふ小倉

雑御哥の中に　伏見院御哥

よる雨よりもおりてこひやむちさとのはるえこにかゝるも

元久元年七月小倉社哥合小倉山雨と

大蔵卿有家

みな世まてしふを清めり石上ふる山の雨のゆふ暮

題しらす　儀子内親王

山松はみえつく雲にさえそて清むさのこれ夕暮の雨

藤原親行朝臣

野の雨は嵐より雨は晴てぬれりの松とみゆる白雲

藤原正綱朝臣女

雨は今はれぬとみつる山の松よりきれてゆく白雲

百首哥奉し時　永福門院内侍

雨そゝく色こそ見えね山の端にたちのほりてのかゝる雲そ（まよへる）

題しらす　藤原為基朝臣

山めくりや雨晴のかゝる雲乃ひまよりのこれる里も一むら

従三位親子

岩はしや紫の煙たちくみえて今とてさき山の下庵

雑哥の中に　進子内親王

立のほる塩やのけふりひとすちに山本の里のしるへとそなる一むら

嘉元百首哥に山を　後山本前太政大臣

白雲のへたてゝみゆるをちかたの山もとちかくかすむ遠山や道しらす

前大僧正慈順

三の瀬ふる河のなをとなかへてそ我身の程の思ひしらるゝ情なれ

雑御哥の中に　伏見院御哥

浦風はみなとの葦に吹しほりゆふ暮しるき浪の上かな

後二条院御哥

うき松の末葉にみえてしつむ日の影そ波にしつかなる

永福門院

しらさきや入日の波の色まてしらぬ小さき磯の松かけ

藤原為基朝臣

磯山の陰なる海はみとりにて夕日にみゆるおきつしら浪

祝部成茂

白浪の寄せの山の峰よりも吹まよふ風そ吹

藤原朝村

かつしかのまゝの風吹よせて夕波こゆるよとのつきはし

院兵衛督

うちよするあら磯浪の立かへりやしほにはぬれ[illegible]

眺望の心を　　前中納言定家
こと浦の波とみえしは入日さす山のはかすむあまのかるかや
藤原為朝臣
清見かた磯山かけて遠さかる入日のこれる松原
りのへゆく小舟のかけりゆく
よみ人不知
風ふけはよせくる浪にいさりするあまやとふらむこゝろのうちそね
題しらす
玉津嶋みるともあかぬいにしへの清みかたこそかはらぬあ
あまつかせ貝をひろふとあまをとめよせくる波よ花てみよ
あはれなる舟のうちなるみちくる潮にまし世子の里の舟あ
宝治百首に江蘆を
山階入道左大臣
難波江の夕塩とほくみちぬれは見えてくらきあしの村立
浪のうへにゆけ乃京よりおもひやるへの
りとにつゝすふさの乃ゝ心ふさそ絶まの
津守国基
浪のうへのなにはのうらそいふすとも思ひそみちとそれはしる
題しらす
光明峯寺入道前摂政太政大臣
つのくにの難波の里は浦ちかくしほみちくるとあまのつり舟

前中納言為相女

わか浦の松風をきかゝさへもすみなれてこそ波よたかふ

従三位行平

これ出てむこの浦よりみわたせは波まにうかふ住吉の松

日吉へまうつとてからさきの松をよめる

従二位為子

さゝ浪やみきはにきゆる真砂地に雨ふるいろあさき二月の雲

雑哥下

前中納言有光

よさの海や霧てとをきあみのよゆくゝるみえぬあまの釣舟

従二位家隆

明わたる浦の松風このまより雲かゝるあまの釣舟

前中納言基成

浦くの波まに数みえて沖よ出てふあまのいさり火

従二位為子

これ出る影も波まに数みえぬかひ風もやさし浦の釣舟

前大納言為兼

ねうらてつりしにかよふさよにかへりける舟もうらふと浜

従二位兼行

河むかひまて水くてる明かの小出る舟乃ことをそ定めゆる

百首哥奉し時雑哥

前内大臣

苔むして人のゆききの絶えしよりまてゝやふるき大路

題しらす　前大納言為兼

谷川のかかるふちゆく橋のうへに行人もなし西乃夕くれ

かつのへやならひぬ松は声して下草しけき山路ぞせ

藤原為守女

苔ふかき松のしつえに吹とめてみ山の嵐声しつかなり

従二位宣子

山人のをれるつま業の枝よりゆく家路をかへてつもりし嵐

従三位親子

つまくと山かけさひしき夕暮のまゝによむかふ松の一りと

前大納言為兼

見るとなきまゝも程経てきりむかふ砌の雲の下そ

夕松といふことを　伏見院御哥

いましもは嵐にまよふ色もなきみどりの松の夕暮の山

百首哥奉りし時　権大納言公蔭

とのゆかき松の梢を神さびてこゝろしき枝は実もなく

雑哥の中に　浄妙寺左大臣

暮かかる峰の行の村雲をめねてわくらふ声さびしき

康永二年哥合に雑色といふことを

嚴安門院

みとりこき日影の山のはる〳〵とおのれまかはす渡る白さき

さきを　　伏見院御製

山もとの田面よりたつ白鷺のゆくかたみれは森の一村

雅有よ　　前中納言為相

苔の庵や木ふかきこにはなれて有ともよかゝと山旅の忘

従三位忠嗣

よの中は鳥の音さへなき奥山の曉ならはねさめならまし

山家夏といふことを　　正三位隆教

吹おろす嶺の山の松風に雨きえてみゆる萩の通路

三十首歌の中に山家松　　前中納言定家

しのはれん物ともなしに小倉山軒はの松そなれて久しき

山家の心を　　後光院入道前関白太政大臣

松の風音をしのふさへこそ都の人にかたりつましき

山を　　權律師慶運

嶺に月そかゝるあまさかる雲のたなひく山のはにいる

題しらす　　藤原基任

山ふかく住ぬるかひはなかりけり人にしられて世にそむかれは

権律師慈成

山ふかき宿まては人のかよひもせて苔のみつもるまろきはしかな

寛治百首哥に山家嵐を

前大納言為氏

山かけの松のとほそのあけくれに嵐よしはし心してふけ

雑哥の中に

権中納言俊実

身をひとへおもふこころの柴の垣ほいとふ心は世をすてゝそ

式子内親王

我宿はつま木こりつむ山河のしはしかよふ路もたえにして

山家木を

西園寺前内大臣女

こゝにしも嵐ふけとやおもふらむすみなれぬる軒のやま松

百首哥奉りし時

入道二品親王法守

山の松辞にとこそおもひしに嵐そはけしきまさるなる

世をのかれて山ふかくすみ侍りけるに山家

入道前太政大臣女

まつ人のいかりかかるゝ山かけは嵐する風ともとなれ

竹を

前権僧正良海

一すちにひとりもある竹の庭みえぬまて茂るかきね

山柘の苔ふかく人にまかせ侍けり

次に山里

伏見院御哥

ゆくゑぬ岩木を庭の宿にてしさ山松かけ
さびしからす　　佛國禅師

我ためにも世にしと思ふ草の庵よりなかしの嶺の白雲

山家夕といふ事を　　伏見院御哥

山陰やちかき入相の声まてそとの音にたつむ白雲

百首御哥に　　院御哥

ゆきえててらす山の雲ふかしゆきていちうし都まされ

不動寺靜山して侍けり　　源兼氏朝臣

許よ中をくり侍き

前大僧正道玄

山里と人めまれなるみなしともいとひし世のならひにさひしも
さびしからす　　藤原宗秀

とふ人もまれまれなるしは住なれてみ山の松ふきなさ

大納言家雅

松山の岩かね枕君もしてをつらく世の中

寳治百首哥に山家水を　　安嘉門院高倉

人めそれまれなる松の山里に質見れ声をとふせよ
さびしからん　　儀子内親王

こゝろやと思ひしまゝにいふにはひかれん人もとひこぬ奥山嵐

二品法親王兼覚

くちはつる影の箕とてひさしきに庭にさへつる昔の下枝

山家の歌の中に　伏見院御哥

暮ゆく山は夕日のきえのこる影のうすき雲は霞みなりけりな
西と

進子内親王

雲さへつむ蒼きの影は西にまよひてゆくれなゐも色に匂ひき

雑哥に　順徳院御哥

ますらをが山こさつきて出むにも庵は西に海辺松の梢

前大納言忠良

山ふかき峯の庵りは西の空をなかくせくふかくは渡りけり

百首哥奉し時　前大納言実明女

山里はわひしとひとりいひなくて見るにやふかき

田家西をよめる　前大納言為氏

やまかけや庵の影ふく雲おりて田のもさひしき西の夕暮

宝治二年百首哥人々にめされけるついてに
里竹を　後嵯峨院御哥

ともなはん山の里にすみしとてうき世てふ窓のくれ竹

西山の善峯寺にかくれこみ侍けり

二品法親王慈道

この里はそともの小萩ちるまてはかりにもとめぬ妻木こそ也

ましらす　院御哥

さゝなみつ岩ね竹の垣大江殿のこ杉ふりして

宝治百首哥に山家を

山階入道前左大臣

月とても汲みし山の杉くれは通路とありと思ふつまそ草の下水

文保三年後宇多院よりめされける百首哥

の中に　後花山院前内大臣

庵むすふ山下の木末ゝ住はすませんとそ思ふなるらさ

千首哥よみ侍けるに

前大納言為家

あつまふの花咲ちらぬ事こそあり初音まちし嵐の古寺

山里なれは此へまつりそみちまて読侍ける

藤原為基朝臣

月なから嵐にきえやらぬ山かけは住くらしの松の下みち

百首哥よみ侍けり

従三位行数

いかり山ふかしとや月の光も松のいかりけまの志しめ

山家を

伏見院御哥

山里や竹のあらくに入日おちてまや乃あらし数そあらふ

山路のこゝろを　従二位為子

山人のまけかへれる道は峯よりおるゝ紫のあと

雑まと　中務卿宗尊親王

みちせはつま木なかの松陰に柴よせかけてやすむ山人

前大納言公泰

こりしおくをぬりそのなかの人かまれは月まちいてゝかへる山人

ふかき山里に人のまちつくることもなくてなに

しるへ物わすれなかりけれは

前左兵衛督惟方

人はいさしらすゆくへもしらぬ山路にて道はからすも身のほとそしれ

東山にすみ侍けるに従三位頼政朝臣

程なくかへるとせしかはつかはしける

いかにして野中の清水の思ひ出て忘るはかりに又なかるらん

筆のいたやまひにこもりゐてよみ侍ける

静仁法親王

くるとあくと露けき苔の袂かりぬ岩やのおもてを離

玉井といふ所にて

藤原道信朝臣

我なれぬ人よくまもるかきりに結ひおきつる契あるか

高野の奥院へまいりけるに玉川といふ川の

みなかみに毒虫おほかりけれはこのなかれを
のむましきよしをしめしおきてのち
よみ侍ける
弘法大師
わすれてもくみやしつらん旅人の高野のおくの玉川の水
おなし山にのこりてさんこの松とて
阿一上人
これそこのりやくに身よのことそえて思ひとのこる松の木
白川なりける家にすみあらえて年へて
後まうてきてよみ侍ける
前左兵衛督惟方
ふるさとはあさちかすゑになりはてて草はいかりとしけりけれ
大覚寺にすみ侍けるころよめる
二品法親王寛尊
年ふれとあまたそすまれける山のおくにすみけるよにこそ
雑哥に
藤原為守女
命まてありけりやとりのたのみなきよにさためなく侍る
いかにせむともよみすて出けりけるに
夢窓国師
いくかへりよみ捨て出つらんさためなき世にすみかはるらん
百首哥の中に
前中納言定家

鷺のゐる池の汀に松ふりて都のほかの心ちこそすれ

長和五年四月雨のいとのとかにふりけるに

大納言公任によみつかはしける

権中納言定頼

庭へむせて暮せる宿につれ〳〵ととふ人もなきなかめをそする

風雅和歌集巻第十七

雑哥下

題不知　伏見院御哥

あまつそらてる日の下にありなからくもりつる心のくまをとりしめや

雑哥の中に　今上天皇

てるとふりさむきあつさも時ありて民よ心のやすむまもなし

百首哥奉りしとき

権大納言資明

あまともみな心をみえかけん人を治めんかゝみあるとなき世に

述懐の哥中に

左兵衛督直義

しつかなる秋のね覚に世中の人のうれへとおもふくるしさ

光明峯寺入道摂政左大臣

神代よりたえぬ国につたへ今の跡をもたえぬ関のふち川

前大納言経顕

すまて六代つかへすまし白川の水の心もしりいは

雑御哥の中に　後伏見院御哥

あふさきみく秋の月をとへは夫の京にあるかとおもはるゝ哉

前大僧正道玄

ゆるさとをもとめきて空も我月日のいまさらおちぬ世そなき

深心院関白前左大臣

行末のたのみはしるし春日山いつの御代より影にまかせて

文保百首哥に　芬陀利花院前関白内大臣

今日しとおもふ心をみかさ山いつの御代とも神にしらなん

雑御哥とて　後醍醐院御哥

をさまれる跡をそしのふおしなへてたか昔とはおもひわかねと

百首哥の中に　今上天皇

をさまらぬ世のためのみそうれはしき身のためならは世は何とおもはし

弘和二年十二月四位の従上に叙して拝賀しけるに雪いみしくふりけれは

従三位為継

位山さかりの道に跡とめて伝はるなをは朽さらしこれ山を

藤原秀経

尽しける今を伝へて位山昔の跡にかへるとかさるや

百首哥奉りし時

前大納言實教

老の身に星一つ加へ位山のほりぬるこそくやしかりける

雑御哥の中に

伏見院御哥

拙なくも身の道のみを歎くかな我心にそかなはぬ世はあらしまて

藤原為守女

なさけのみ身を思ひそくやしかるあるにまかする世を遁れ

法印能範

いにしへは歌しくともなきをまとはるゝにかへりゆくての道

藤原重能

今はとて迷ひ山ふけるもろ人の庭いつくにかおもむきも

百首哥奉りし時

藤原為明朝臣

うれしさもあるにまかする我身こそうきもよしあしに世を遁れ

雑哥とて

嚴安法師

身そ何しめ心とちかひとの身にふかけてうれ世のうさにそまるとそ思ふ

皇慶贈僧正慈恵和尚の諡号をかりたま

ちりてよみ侍りける

入道二品親王尊円

白河の水のみなかみ絶えずこそいまもそのこゝろをなかすらん

題しらず　大江廣秀

水上の風もあらそひうけて行河の末まても心のあらさき

百首歌奉りし時　左兵衛督直義

多くの山ふかき海ともまたはらし我身にうくる光なりけり

中納言に侍りし時よみ侍りける

前中納言為相

のかれせぬありきつるみのとしくれて人のなさけもよそね渡の関守

文保百首歌に

芬陁利花院前関白左大臣

さらし身となるに歎かんはかなかりしのふかきめくみを我世の末まて

世をのかれてこもりて侍りけるに建武の比

世を猶しらへ侍るとてよめる

藤原時藤

おしくはおもふ人は過にしの月をいまふしても世はつらね

題しらず　源致雄

命をもおしからぬ心にまかせてみのぬのたよりをたのみきたれあらむ

百首歌奉りし時　入道二品親王尊円

百敷や御園の竹のよゝしてとはまさていつまても我君ならむ

雑歌に

西園寺前内大臣女

ともすれは我とそへつゝよはいそくなれ月は家に居ても山にいるらん

なやむ事侍ける比雨のふりけるに前内
大臣とひて侍れはよみてつかはしける

慶政上人

何となくおもひ続くる雨もれと涙はあらそひき

西山にすみ侍けるに京へ出る時草庵の障
子にかきつけ侍る

前大僧正道玄

入るさは又は出しと思ふ身のなにゆへいそく家ちなるらん

述懐歌の中に

弾正尹邦省親王

身のうさをとひとふ人にまかせてはわかあらましを猶そむくかな

前大僧正守誉

いまそとはおもふかりそあらし世のうきになくさむたのみなるらん

権律師有淳

世中はうきには猶しさ捨てともいつ捨はてんと思ひあへせん

如円法師

なましゐにあれはおもひもわかぬ身のうきをとはぬ袖は涙なりけり

源宗満

数々のつらさしのまゝ身のうさにまつは涙の何になるらん

皇太后宮大夫俊成千載集えらひ侍ける時
申つかはしける

左兵衛督惟方

りは草のかきつめさるわれ浦のその人かくに思ひそとや

返し　皇太后宮大夫俊成

いまも猶昔は忘れねともかきとめやうらのうら波

ぬれしらす　平久時

かさねけりける川のなかしておもひとも見えさらにすゝわ浦波

大江宗秀

わすれにし人をよをへて花はたゝつてにけり玉はなれと

嵯峨重保か家の障子に時の名ある人の

ことかきそへ歌よめるよし歌と色紙か

これかつきよしや給はれてわたしも人ゝ

らんとあるに侍りをるに位たかき人ゝをそ

まあつめてうぬよしやしくりをれはたさき

しかさうきそてつらきすとて

摂政太政大臣

和歌の浦の治の枝よりみよにかゝるひとも見ゆかゝ

皇太后宮大夫俊成打聞せんとて忠盛卿

歌をこひ侍けるにつかはすとて

前参議経盛

家の風吹とも見えぬ木のもとにかきそへし言葉をちらさぬ

百首歌奉りし時　左近衛中将公義

ことし葉の六くさなからにほまくほしそこゆへ後鳥羽院のみち

基俊に古今集をかりて返しつかはす

とて　皇太后宮大夫俊成

君なくはいかにしてかははるけまし古へ今のおほつかなさを

返し　基俊

かきとめしいにしへ今のことの葉をのこさす君につたへつるかな

西行法師みもすそ歌合とて前中納言定

家に判をこひしに侍けるをあなかちに申侍れは

ふかくいなひけるをあなかちに申侍れは判して

つかはすとて山水のふかゝれとてもかきやらは

君にちきりをむすふはかりそと申侍ける

返事に　西行法師

むすひなかす末をこゝろにたのむかなふかき契りをしる山河の水

建保三年内裏にめされける名所百首

歌の中に　辰市

前中納言定家

後鳥羽院によ我名はあらつの市やいさ住吉のあきなふ人の

寛治百首歌たてまつりける時浦舟

前大納言為家

わか浦に月そさしくる波のおもをさし出る舟のかくるゝはかり

従三位頼政正下四位に叙して侍りける時そ
のよろこびいひつかはすとて
藤原隆信朝臣
われ猶も位のやまのはるかなる波の音にはたえて身にも嬉しそく
返し
従三位頼政
いかにして位のかゝんこゆへしと思ひもよらぬ猶沼
おほし人高倉院の殿上人還昇をゆる
されて侍りけるにやつかはしける
清輔朝臣
立かへる雲のかけはしにのりてこそ渡へゆくとはしるらん
橘為仲朝臣蔵人おりて又の日ほかへまかりに
おりけるあしたは年経ともおもへし雲井そ
立しかへらんことを申て侍ける返り
大貳三位
藤原にあきやさむめの藤つかさいりそれ雲の上にはめや
高倉院御時殿上をはなれ侍りしそこはなれ侍り
またゆるされて殿上をはなれまかりゆるされさ
せけるに参らせよとありしかはそて蔵人弁に申つ
かはしける
太宰大貳重家
藤の花こゝろをかけしかひありてたちかへりぬる雲のうへかな

石清水臨時祭の舞人にてあちやうきこゆ
のあつしえこんきも侍へきよしいひおこせ
たりけれは　　藤原定長
みもこんきとやいふらんありちきまふとてもをさなき
六条院位におりゐ給し時臨時祭に陪
従よりよりわかされてまいりけるにやかて
つきんひおほされつまはさせて中宮の御方
の女房にたてまつりをせける
清輔朝臣
昔みし雲のかけはしかはらねと我身ひとつのへたてえぬるかな

世をのかれて後大納言三位に琵琶の譜を
かへすとて　　性子内親王
うきはしはなれし月の面影をとめてみるそかなしかりける
文保三年百首哥めされける時
民部卿為定
今よりのかりそやらぬ位山こゝろさし世をしれおとらん
白髪と人の心にみえつらんとしのあつ
高弁上人
昔より人の心を白糸にそめしはまゆの心にあれきん
世をのかれて木曽路といふ所をとほるとて

兼好法師
思ひたつ木曽のあさ布あさくのみそめてやむへき袖の色かは
題しらす　藤原雅親
なかなかに花やもみちを見る人の秋に来ていかにと問ふらん
西行法師
花ちらて月はくもらぬ世なりせは物はおもはぬ我身ならまし
権少僧都光覚竪義請のそみ侍ける時
基俊
九の皐に鳴なるあしたつの子をおもふ心は空にしるへし
法性寺入道前関白太政大臣
よそにても子をおもふなる鳴声を哀と人のきくそかなしき
ある人のなくしくはいめんせられけるを聞て侍りけれは
高弁上人
なからへてとはるへしとはおもひきや人のなさけも命なりけり
雑哥に　祝子内親王
うしとてもいかにそむかん世をおもふ捨かねつゝもおしむ身のうさ
前中納言為相
うしとてもうき身はすてよはやいそちすきぬる程のいのちなりけり
百首歌の時　前大納言実教
思ひ出もなくてすきこし年月の数よりまさるは涙なりけり

雑哥上

法印延全

七十の年かさねきて今は身にあまるめくみのまへと光

前中納言為相女

朝夕の心にかゝりのうさをはらくもあはれ月と人やしるらん

百首哥奉し時　厳安門院小宰相

思ふことなくてむなしき空の月をとてそ身のなにはしてしらるらん

前大僧正道玄

今更にしらぬとふそなかなかれぬへき世はなれぬとしるとも

宣光門院新右衛門督

まそある心も我身そのうへにまかせつゝおもひのほかにせしくらいそ世そ

儀子内親王

さふとなくはやまそとまむとてためのまへに世を照らん

百首哥奉し時　前中納言雅孝

あるふしと思ひなるゝも何はの小月をなくはなてそ身をまかせ

世中はかくしりきる東坂やまはまよはすまし

けふの道のゆくへもまよはぬ坂よみくたりそけり

権大納言公蔭

はかなくも思ひやりても其のほかのみな猿の声をはかなりききそゑ

御返し　院御製

ことの葉にもあはれをこひやはらかくさとてあめしとや見るらん

文保のころほひさまかへてこもりゐて侍りける
ころ山里にて　藤原為基朝臣
へたてこしみすてゝもまぬかれぬ山よりもわかこゝろの八重の白雲

述懐歌の中に　新宰相
行末をたのむとなくやすらはん心ひとつも世をそむきえし

藤原秀信
うき世とはおもひしるにも捨やらてなほましはりのことくならぬか

源仲教
うき世とはおもへていとふ理を我身ひとつはしらてこそふれ

権少僧都浄道

うれしくと思ひしとてもいつか世をそむきすてたる身ならねは

従二位宣子
おりゝの身はおもほえもうき世より我心にはさもあらぬ世や（身）

文永の比西山へいりこもりて侍りけれは
出家ののちよそにて侍る人のもとに

前大僧正道玄
世のうさに思ひしらるゝ山里はいさいつまてと頼もさためぬ

閑居述懐といふことを

西園寺前内大臣女
衣手そよりかゝる庭のなともなきりより誰を待身なれは

百と

俊頼朝臣

行としハ返ら数ならぬ身をとおもふ君をやとしへてよ
大峯のふる庵のとまりふく

前大僧正道昭

瀬のみふるや軒の梅ひとさかり月を袖にやとす

題しらす

藤原宗秀

山ふかく身をかくしても世中とのかれそぬハ心なりけり

皆法師

かくりとふあつめし身なれハ心からもとおもはぬ命ハ

よみ人しらす

身ハかくてのかれそめぬる世中と人のうへまて猶いとふかれ

権僧正忠性

世をとしとおもひしかとも我山乃かけにハつくすことそかなしき

前大僧正公什

世をとらぬ網のけなハ一まちにかゝるいとまもなきよみかな

雑歌の中に

崇徳院御哥

我心誰にかたらん仏にもおもひの猶物思ひしもあけまハ

前大僧正道玄

いかにせんそむかしとおもひはなれ捨しもそれハこの世之かり

前左兵衛督推方役の別当によりて詠みける

なきくとおりけりとおもふゝ年すきぬれは中
つゝみしきか　　読人不知
歎きとしもしらぬ世の中つらけれと嫉きことそ遠とそきく
返し　　おた業清僧推方
ふかりともいかてそおもふかまゝならひとそておもふまちて世をうらむ
題しらす　　従二位為子
人に我おもふもしらぬ夢にゝとうらむとおもひそなき
康永二年歌合に雑心を
儀子内親王
ねよとにとそとめはなからぬ世中に忘られはつるうき
百首歌の中に　　安嘉門院四条
いとそ身の雲ゐるとなかれやらて生つきこの世なりけり
雑歌の中に　　徽安門院
世中はさらぬひとにもうらむらんいかにむくいて雑かましくまよふ
寿成門院
おもほえの心はまことにみる夢とおもひはなすうつゝともかれ
百首歌奉りし時　　徽安門院小宰相
夢はさもうつゝにおもふかはまほしの夢そはまことにうつる夢かな
夢中述懐を　　後京極摂政前太政大臣
うつゝねのそらかれ夢ならはなかにはおもひのさきかなしき

夢中観楽又紛然といふことを

太上天皇

夢にても嬉しきことのみえつるはさめても身にぞうれしき

雑の哥の中に　後鳥羽院御哥

たのしみは夢はうつゝにかはりぬるむかしをいまにかへすともみん

権僧正永縁

なか〳〵の夢ならずしてみつる夢はうつゝとぞいはで定めん

前大僧正慈鎮

夢ぞたゞおもふまゝなる身なりとも嬉しかるべきこの世ならねば

同じ百首の哥に夢を

後山本前太政大臣

さらぬだにおもひさだめぬ夢とてもひとつおもひをみるはかなしき

なほしも心と

ぬる世よりねてもさめてもみつゝ夢と

百首の哥に　院御哥

うきことのはかなき夢とみるぞひとつの夢やかはらざりける

正慶二年藤原為基朝臣世をそむきぬと

聞てつかはしける　永陽門院左京大夫

おもひきやはかなき夢のうきよをばぬまに世をや捨けん

返し　藤原為基朝臣

はかならぬかゝる世に猶のかれつゝ捨かねつる身をも惜みけれ

雑哥の中に　内大臣室

暁の鐘ハ枕にきこゆれとかゝる世の夢ハさめぬ人そなき

従二位為子

なかれ秋よ浦にふる時雨のおとさめて夢とゆめとも思ひわかせん

藤原為基朝臣

あはれうちに見るよりかの世ハはかなさやさらに夢ハ夢なり

前中納言為相女

はかなき世の夢の世とさて又何ましはあすも見ゆ

常光院入道前関白太政大臣

見し人もなくなりぬる老の世に誰と昔をかたりあはせん

源頼貞

哀とて我ハ見えとふ人もなしとひしもすくさん

永福門院内侍

今ふあり昔よりこそまされハ見え夢をも哀つさなき

建礼門院大原におはしましける比まいりたるに夢のこゝちのみしけれハいひ侍ける

右京大夫

しや夢もしや夢とたとられていかにおもへとうつゝとそなき

水無瀬にてよみ侍ける比後鳥羽院下野あれ

とゝめてかるせ河おとれむかしとおもふ
よりなみの関とまもりもつくとてそは
をも世のきゝにおひてはつかしけれ

前参議経継

君もはやとまりもしらぬ波間にひとつの関ともふに

懐旧の心を　藤原隆信朝臣

二葉よりひとつふたつなれ昔にも藤にかゝるに松そかなしき

院に三十首歌めしし時夜懐旧を

弾正尹忠房親王

むは玉のよるの夜をはかりにはまちたのむ藤もたえなん

雑歌の中に

儀子内親王

はかそほとしきぬは見もこゝ昔とこそ藤かそうたけれ

前関白太政大臣　通

はゝくとる道はそこととひねの藤そむかしの影なりけり

式部卿恒明親王

そのころ昔ふりにし藤波をこゝろにしもそはまさそとん

藤原宗親

とひねの藤よりかいたゞきまてはそてふる昔なりけれ

季丈人を　右内大臣　冬

みくも杉とひそまはる第の代中くつきさるをかなり

配所にありて後清輔朝臣許より為に

子のさしみを使ぬふるさまはくたにまて

ねきや嶋んとやて侍けるをりよ

民部卿成範

ふく小嶋そわか進むしる為は故りをみさしく湯りやとまに

雑歌の中に

太宰大弐基氏

いにしへの今みる斗思ゆへは我老らくにねはなりなん

高階宗成朝臣

いにしへはまよはせしそおもひ出つる人はつまぬ物思そよける

如新法師

志つ庵の数のまとおもふみをもたえしたはしらしとも

後宇多院宰相典侍

うしろ風重くこさも又今はかなくりけ思出はなし

菅原頼氏

よに出て長背といはれしもかくし小身おほき時をそ絶

三善遠衡朝臣

おもひ小昔をしる海をそ昔のたりとしともみは孫そ

藤原為嗣朝臣

うつくし今みるとはさらすくる昔は夢そ心なりける

後宇多院宰相典侍

老か身ハみちしるへにてとをき昔のあとそしらるれ

従二位為継

思ひその家の月なれハいつしかへてふりハ老をいそくらん

前関白左大臣基

てらぬ我身のかけのいつまてもるよはこゝハ程そかなしき

よみ人しらす

るかまへハいふとみちとハいはてともかくそ昔へけれ

文保三年後宇多院にたてまつりける百首

哥の中に

権中納言公雄

あやうしにしのひの身の昔かた物忘ましすゝ老のこゝに

述懐の哥に　藤原範秀

みとせハおかゝしくなき同世よ老のいのちなれかふかゝらん

雑哥の中に

従二位為子

そむかやはや世中とかりのあはれまてや猶すさらん

藤原資隆朝臣

ねかしく義とハしらます猿しぬおもはれそとみなまそらん

りつともに世とそむきなんと契けん人よ

んかしすなかしかなしとハいハく

よみ人しらす

そうなさハまふへきをしも志らぬ世中にはさりともをしのこともかなとゑん

返し　　寂然法師

思へんとかしいつはりにおもてこの世をいとひけらん

我若未忘世雖閑心亦忙世若未忘我雖

退身難免といふことを

中務卿宗尊親王

そむくともなをやこゝろのおほつかなき世にはまた我身ならは

出家の後述懐哥の中に

前中納言有忠

みをすてゝやすくそ思ふ身よりは業の月の世にまよふ人はとちても

なくしおもふ所をはなれて秋のくれしめつくし永

福門院に申させ給ける

後伏見院御哥

捨まてゝ思ふは遠き苔衣いまより露をいそく達

御返し　　永福門院

思やる苔の衣に露かけてもとのたもとの秋やこふらん

延元々年八月竹林院前左大臣かさりおろして侍りけるときゝてつかはしける

前大納言為定

うくふかしむつき世を思ひそてゆくのたよ入そうつれ

返し

竹林院入道前左大臣

消ぬへき露乃命とおもふとて捨ぬる世をもなほそむきぬる

年ころめしつかひけるものゝ出家し侍けれハ 民部卿成範

なからへて我とまるへき宿ならはうしとも人をいかゝ恨むと

雑歌の中に 藤原為守女

わすれてはうきはかりなる身をそへてはかなくいつか来とまらん

内侍部卿のあやにくしみ侍けるよ(に)ゆへちまい
かしはのつけはつかはされける 永福門院

忘れぬる昔のつらさもうれしさもあはれにたえてつらかるへき

返し 同院内侍

あるをみてはかくやと思ふ病のつゝきける歌よみておくりしに

哀そふさそそこさそ時のまも君にかはらぬ命ともかな

述懐の心をよめる 寂然法師

なにとなくまつことゝおもふくらもしさまにしき世をそむきなからも

雑の歌を 従三位盛親

今はたゝそむきぬる世とおもへはすみそめの夕の色の哀なりけれ

夕暮の雲のけしきをみるにつけあはれくらしよめる

待賢門院堀河

それとなき夕の雲にましりなは哀誰かハわきてなかめん

題しらす　寂然法師

なかつきの光わかるゝ婦の田にひとりおもひの露の命ハ

俊恵法師

のちの世とおもへはつらきふるさとにゆめを出ていさゝおもひのほとのまの程

前大僧正慈鎮

おもひしるある別の時まねをあひも見ぬ世の空ひさそ

九月九日為道朝臣みまかりて後三とせめくりぬるあした日をすくしもおもひ出て　前大納言為世につかハしける

後二条院御哥

まよふとおもへハ別し人の名残まりおやめもつらき袖とそ思

御返し　前大納言為世

けふハ猶おやの草葉のかけをこそいとゝみせし露そかはかぬ

雑哥の中に　二条入道太政大臣

哀ともそれハ昔よなかきとてさらなれ数よ人にいはれん

さらなれとのこさこそえけれはよみ侍ける

院冷泉

いにしへの月ハおやまによりつきてよその哀とこそいひつれか

くちもいか成ましけれはよみ侍ける

郁芳門院宣旨

露の身は消えぬとも言の葉の末ても誰かとひみむ

昔は金對院の桜をとめてける人の年をへて枝
いろぬかんといふにおりてつかはすとて

上西門院兵衛

なふとも昔かたりにぬかゆけはもとみしよの花やかたらむ

返し

二條太皇太后宮堀川

くちはつる世にもまたとはゝ宿かはる色もかはらず

後深草院かくれ給ひての年伏見院
へ桜花をおりてまゐらせ給ふとて

遊義門院

春の形見ににほふもこれも桜かなにほひもさきたて

返し

伏見院御製

花は桜をもわかれやかはらぬ身のゝ桜かれはの春やむかしを

文永九年二月十七日後嵯峨院かくれ給ひ
ぬときゝていそきまいりたまてとひつけ
給ひける

中務卿宗尊親王

なからへてわかるゝきさらきの別れそ人もなしとふ春のなみた

中臣祐春墓に桜を折りて参るとて

中臣祐任

なきつゝ苔の下にもみやことて心とゝめし花をおもへつゝ
前大僧正行意身罷りて後なかなかにおもひ
こさらへくなきうしおもえ給けるを文の奥に書
きえし山よのおりて花のなりしろく咲ける
とみくよと給けつ　権僧正全玄
かふられは丹山のもは咲よをりなけさそ春とかくらけ
後深草院くれさせ給ひく又のとしの二月なら
つまあふりかゝる覚助法親王の許よりよまま
ませけつ　伏見院御哥
露けさは浮みゆ風のまへの涙とて袂をうけさる袖のあるめ

御返し　二品法親王覚助
かきくらしたえし袂の涙ほそのまゝに行秋ちかのかたの春雨
雑歌の中に　西園寺前内大臣女
露さえんろのゆふを誰かしのんしふ人もとらしよきさふらし
後一条入道関白身まかりて後八月の末
つらく袖の露もおりしもとひやなるよし
中なる人の色もすゝに　従二位隆博
さへりみてもかく袖の上は露をさゆまる秋の心を
深心院関白身まかりにけるとき時よみてつかは

けり　　藤原光俊朝臣

はかなしとおもひえぬ程のへだてさへなげくとなれば逢ふよしもがな

返し　　高階宗成朝臣

今は程なくとおもふこゝろもさりともはかなくて待つらん

太宰帥世良親王の一めぐりに臨川寺にてよみ侍りとて　　懽子内親王

わすれぬはおなじ世ながら雲の上の露消えしあとをたづねてぞとふ

二条院にはべりし又の年に春南殿の花をおりて人のもとへつかはしける

前大納言公蔭

九重にみよの春は思ひやれかはらぬ花の色はまさると

又の年の春になりて後はしれるの山里に侍りけるころ三月ばかりに源仲正がもとにつかはしける

寂然法師

春までもとまらぬ花の山里をもとめてたれかとはんとすらん

返し　　源仲正

かへるさもふみゝる人もなき山里にかへりてとふ人もなき

殷富門院はかなくなりてのちまゐりけり

永福門院内侍

ともしびのかゝげつくしてとまりなばさらぬ別のものとしらまし

御返し　院御哥

花のちり春のくれゆくなこりにも志らぬ歌のかきそへなき

後京極摂政身まかりて後四五日ありて従二
位家隆許よりふしてこひおきてもゆかし
春乃花秋のおもひのさかんとすらんと申て
侍けるをみるに　前中納言定家

花ちりて色も今は白露のおくとはわかれまさるとはまされて

やまひかきりに侍ける時いひさしをきける

藤原為秀

今年まてはよもとせ冬のなかきにしら世は夏をみてつかぬ

雑哥の中に　従二位為子

人の世はひかりとふを一とせの春もちりそてゆくを猶ありさき

百首哥奉りし時　永福門院右衛門督

思ふ事なきをあるとてもいくかのおく盛まてそ哀れ知る

云常のんと　僧正慈快

こゝろひとよその袖とともふかな人よりをもつゝなれ
秋のもみつるちくさうてひきてかの月

まかりにけれは　伏見院御哥

夜昼なれてふ嫌かくそてはまた人よわれてや時すてそけり

前中納言為相七年の忌日に　藤原為秀

於良一品經供養し侍りつゐてに秋懐旧と
いふ事を　久良親王
三とせ海はおほし袂てもや七年の秋をこゝにまり
遊義門院のかくれさせ給ひにけるまへてこ
りてもおそ給ひけるりこゝの年の七月七日猿
てつかはし侍る　備前
銀河かはらの空はかはらねとなれし雲井の秋そ恋しき
月催無常といふ事を
正三位季経
とまるとてもたのみなき世をさそや雲ゐにかゝる有明の月

平貞時朝臣身まかりて後百ヶ日すき
ての比よみつかはしける
前中納言為相
過てふ日数をかそへても昨の夢に又なりぬるか
なし
藤原雅氏
そのさとにをりて蓬生に庭はうつりて日数よるそ哉
正和五年九月佛國禪師ゐなかへくたり
下野の那須によりて侍りける時書おくりす
かりての山をもとをみたまへるよしたして契
給けるに其の年の十月に入滅し侍りにけれは

佛慈禅師にしめしつかはしける

前中納言為相

咲花の雲を越ゆるかさて風の末なる葉のかゝる世に

従三位守子かくよみけるとそ

院御製

めくりあふ人の袂におとろかす世にをとりそ侍るふかき

契しらす

中務卿宗尊親王

見し人の此煙たつ雲ちもしらぬ世にそまよふれ

朔平門院かくれ給て後よみ給ける

永陽（福）門院左（右）京大夫

残りける心も過にし袂にそへて煙とやならんと見し

安嘉門院の院中九日の法事あるへく人々すゝめけるに

は前大僧正教範許より申おくりて侍ける

し程はなけれとも君をおもふも別れはかなり

なりにけるつかへし侍るに

従二位為経

立出る君ゆへおもひ出の袂さへこそ日数なるけれ（れとも）

権大納言公成女よみ侍りけるに身ゆか

つらそなけきさけはなと侍ける

権大納言長家

忘つゝ春やとはゝの衣まてうつりし月を今宵あはれや
前大僧正慈勝身まかりて後思ひやる事を
侍ける　前大僧正慈恵
ともなひし日数はつもりて過さは又そたつね別なかり
後西園寺入道前太政大臣身まかりて又のとし
服ぬき侍とて　前大僧正道意
うらむつる袖の衣はみなへになかるとなれは又そかわき
桐雲法師身まかりて侍るを聞て同法師
とふらひ侍らねはあまりよそにてつゝしけれは
文の中に　寂然法師

いかにせん袖の衣はぬきすとも別し人のゆくゑなをとよ
返し　西行法師
なき人をしのふ思ひのなくさまは跡をもとめぬ我にそ有ける
めなかくなりてやみはかりて拂ふなかく
おもかけはよみ侍ける
祝部成仲
秋風の身にはむかしの過さはつまなれ家の松見えけり
後徳大寺院くれ侍て後他骨を従三位守
子墓所よなりへてをれるてさつくへきさはし
法遺識よ侍てなさめ奉るとて

清空上人

かく露もひとつちもとにむすへやは蛇もおなし聖によみなん

右近中将惟盛熊野浦にてうせにけれは

とききてよみ侍けり

建礼門院右京大夫

なくさめてはかなきあとをみまくらの波のもとにも身をなくさめ

おなし比右近中将資盛西国に侍けるに

たよりにつけて申つかはしける

おなし世と猶思ふこそかなしけれあるかあるにもあらぬ此世に

右中将はうしなはれにける後西国のかたへまかり

てかへり都よりて侍けるに申ける

人はこれなくなりにしよりはいとゝむかしの

こひしかりけれは　全性法師

ちきりもそのあらすなりぬる世は何の都も旅の心地こそすれ

後醍醐院くれ侍ける後人のなけきの

つゝかへるさいつかりしや思ひの外の我もむかし

の雨けふにつけてみえ侍れはこのうちに一句を

なさせて経の裏に書かれしよしみ侍けるに

の中に　前太政大臣

わか道に人をもかへりみよかし草の原のちりをつくさむ

後光明峯寺摂政身三年佛事の次源邦
長朝臣にをくり侍ける

正二位澄教

いかに思ひいつらん涙も袖のうへに三とせの秋の花の露けさ

かへし

源邦長朝臣

さきのあさき袖につゆけき秋の三とせの程そぬれまさりける

遊義門院かくれさせ給て後太炊御門にすませ給ひ
て太后のそて經供養し侍るに大納言爲世
ちかきをうきたる扇をとりけれはつて侍
けるにかきつけさせ侍りける

法印澄恩

こゝろやはなれしその袖のうちにみしひの煙なるらん

前太政大臣母身三年の佛事し侍けるに
彼人のうらに無量寿經をうつせ侍けるを見
かの經にかきつけさせ侍ける

後宇多院御哥

うつりて消えし煙の跡もなほ玉とそみつらむとそ思ふ

返し

おなし太政大臣

見しらねは光もうつる蓮葉の露にたまの家の白玉

前大納言爲家身まかりて後百首哥よみ

侍けるに　　安嘉門院四条

夜よは人あらそともまたぬ露さへし草のはらよりかつ（なほ）色そ
くやしくそはらぬ別よ見えそ思ひしも人よりさきにさうけゝ

題しらす　　よみ人しらす

あかさりし人よりもちて逢しとわかぬ君にをくれて妻となる（かれ）
むなしき名のみなりて侍る小服きるとて

よめる　　赤染衛門

我こゝろさまよ思ひし藤衣身にかさねてそ別かなしき
かたらひ侍ける人のおやなくなりてとふらひ

つかはしける　　能宣朝臣

わかれにはすゝみしとぞ思ふ深の色をかさねてもなほ
道済筑前守にてくたり侍ける国にて身まかり
なにとさて侍りけるにまかりてこそ侍りけれ

ことを思ひ出て　　赤染衛門

御いみのさ衣ともあめしかへ別に今はさりぬる猿の思（も）れ

後一条院かくれ給ての比月をみて

上東門院五節

はやかりし月を涙にくもりつゝ昔み世のこゝちやはする（こそされ）
ちゝなくなりて日数ものこりさくなかり

寂念法師（然）

侍けるに

忘はかなくたのあはれはさもあらん月日もなをやさしかるらん

前中納言定家母のおもひに侍ける法性寺にて
山の中堂にこもり侍に雪のいたくふり
けるつとめておもひつゝなかむることさてもかくに

皇太后宮大夫俊成

みとふらんや雪にまよふらん此おくのこゝ夜よみえけん

返し

前中納言定家

こちもねと嵐のへれ旅枕やこれ夜よわくらんと

雪のふる日母のもとにまかりて

能阿法師

思ひやる昔の下にこそ小松も雪にうもるらむ

待賢門院の法事の比

上西門院兵衛

あはれとも昔のけふをたのめなみ涙の袖に雨そまさりき

後西園寺入道前太政大臣身まかりて後北山
家に法事ありて花をさゝけて人々
よみ侍けるに山家水と

後伏見院御哥

山里のなこりにさけるふ池の水にむかしこそみそけて猶つき

後深草院七月よくれ給ふてその年の九月

亀山院うせ給ひにけるとし

伏見院御哥

さえ行きそはまたねぬ秋の夜ぞいはさる山嵐や露ぞ見

遊義門院うせ給ひける頃のなけとき

うせ給ひて

なをまでもいやまでとし月をへつつにと御秋の給へ

室町院うせ給ひて後持明院よ御幸なり

て秋乗をとやらんしてうせ給ひけ

かしのみさえぞ衰や人はふりし宿のさみちて

後深草院うせ給ひてのとし神無月のころ

めづらしき普光院入道前関白許よりふみをさ

なりとて冬をかりなくおなじことになりひ

とめ御くよしやて給ける御返事にた

のもり

思へば露の野よりさきて御袖のまなこを

御返事

普光院入道前関白左大臣

思ひやる花の涙おちそひて露も御袖をひまぞふき

つぎの年又亀山院うせ給ひて小前大納言

為兼二とせ秋の初めにはかなくさやかの

露も又ささえぬなりとかきて給ひたりけり

従二位為子

梅の葉も露よりさきにちりそふる世のはかなさの秋そかなしき
おもひしほとにまた世にありけり

伏見院御哥

おほかたの世のなかのみちにもかはらぬ世よ

後醍醐院かくれ給ひける十月に安福殿女御
のまへへ給はせける戒師のうへそのあはれなと申
てよみ給ける　二品法親王慈道

思ひやれふかき海の一入もかはらぬすみそめの袖

これをみて

入道二品親王尊円

冬くれは袖の涙の色しもにさえまさりたる神無月かな

永福門院かくれさせ給ひての比おもひいてゝかなしみにたへす

宣光門院新右衛門督のもとへ申つかはし侍りける

次の

右衛門督

わかれちのなみたはそれの木の葉にもおもひしる哉

伏見院九月三日かくれ給ひける頃

永福門院

恨てもいまはかひなき秋の海にもしるしなか月のけ

文学上人菩提忌の日よみ侍ける

高弁上人

このめくり巻はむしにかゝりさてかり新に写す

きふ乃り久篤

風雅和歌集巻第十八

釈教哥

詠じて歌をつくりよみたまへるよしをきゝていはれける

この哥は善光寺如来の御哥となん

いそき人みたの御舟のかよふ世にのりおくれなはたれかわたさん

又御哥まつらせて聖徳太子のよみた

てまつるとなん

極らくの海をもこえて行く船とみるあをはゆくふなき

これは長治の比ある人めしつかひける子をうしなひ

くして粉川にまうでて彼子をこひさ

かへりくいのりやとてぬるへし
くれうみはおもふかるはれは子れんへも
かくなむまへとてもふくおもひ法にそて
まことゝりきゝ普門観音品の志るし
詠ひけるとなん

法花経序品の心を　西行法師

ちりまかふ花のにほひをさきたてゝ光を法のむしろにそしく

方便品　大僧都源信

妙法のたゝひとつのみありけれは又ふたつなし又三もなし

譬喩品の心をよめる

権僧正永縁

かとはに三の車にいさなひてそ法のみちをあかしまいらせて

不覚不知不驚不怖の心を

慶政上人

おとろきてさとりもわかて夢ぬれやおなし行さき月の雲の空

信解品の心を　前参議経盛

年ふれとかゝりしぬ身もちりのよにいまはふて鶉あひけん

前大納言為氏

いそちまて雨もひとしくそゝかさはたれかそめまし華の庭よ

伏見院かくれ給ひし時人々に一品経すゝめ給ひける

小侍従にとらせて奏しまつらせよとある

入道二品親王守覚

薬草喩品の心を

我そへき五十あまりの春をまてとめくりあふ人さかりなれは

清盛入道前太政大臣

法の雨にまつそほちぬる身なれとも草木はわかぬものにそありける

権大納言頼盛

いさしらす草木の名をもきゝわかてつゆもまたぬはしらぬ身なれは

大僧正行慶

草も木もしけきめくみのいろみえていつれも二葉三葉にあらそめらん

前大納言為氏一品経とてすゝめ侍けるに

安楽行品若入他家不与小女処女寡女等

共語といふ文の心をよめる

藤原為明朝臣

なにめてゝ浅ちのいりそすゝむ女郎花も宿にとゝめてゆかん

寿量品の心を　　参議雅親

こゝに世そ入ぬとみえし月影も又山のはにいさむかしそなき

分別功徳品を　　正二位隆教

みな人をとまるさかひとおもふなとてつみなくしもわれや法の舟

薬王品是真精進是名真法供養如来を

いつくともなき世給けり

院御製

ながめやる夕日影さえて柳まかせき庭風

妙音品　前深承

こゝにのみありとやいはん今もさかふる法をとけ

普門品乃即得浅處文の心を

平忠度朝臣

おりたちてたのむとなれはあすか川淵も瀬になるものとこそきけ

陀羅尼品　前深承門

はまりつちひとふく風てつまへは末の世迄もゆるしとそ思

般若経常啼菩薩を

前大僧正覚実

法の為我身をうりし車をもうき世をめくるたよりなるらん

円覚経生死涅槃猶如昨夢の心を

院御製

まよひてもみるゆめぞとなりしかはさとるもおなし夢

居一切時不起妄念

身のうちにおふ雲のへたてなき月のひかりのさやかなる松

皆是下是皆是道場の心を

夢窓国師

あてときさむらあれかいつてふみもあらちなきなり

本覚讃の心をよめる

法印実澄

すゝみこし宵ともふられてやむきさらにね心の猿人

随求陀羅尼経の倶緒婆羅門をよみ侍る

前大納言忠良

極楽の清めともし吹風にたゆらめきき声の下まてそゆく

但指云明即是法性といふことを

慶政上人

ときめにしえひの枕ゆめの夢見て秋やそもえる縁なり

三諦一諦非三非一の心を

院御製

法のみつにうつる影とさくらよ雲にそむけるよるの灯

未得真覚恒処夢中といふことをよめる

寛胤法親王

長夜のやみはれてふまよ衣をゆめとしらぬなる

法印覚懐

さむるまも結たのゝ身にみるまほしなけれ眼のあちもさらす

因明論乃似現量の心を

前大僧正覚実

村雲乃たえまに影ハそけとも猶くもれる秋の夜の月

秋歌乃御歌の中に

後宇多院御製

そのまゝにたえまあらはと思ふ法とわつ三国つたへてゆく道のり

百首歌奉りしに雑歌

入道二品親王法守

我らかみのりハ常に云のたえまなくねかへはまとをるなれ

大梅山ニ住侍りける時僧問雲門云樹凋葉落時如何雲門云體露金風と云ふ因縁を頌せられを給ける次なり

院御歌

高田川みちくるみなみ吉野の山に桜をれさく

藤原為基朝臣

見るやいかに山の木風におちつもる猶はる道ゆく虎渓まておくりしらせす

佛國禅師

よすからの緑来る鳥の音ハ寂の宅にとふ鶴のおと

夢窓國師

出るとも入とも月をおもはねハ心にかゝる山のはもなし

眉間寅劔といふことを

院御歌

はるかなる秋の空にもしる月ならはこそ影もかはらてすまし

一花開五葉結菓自然成の心を

永福門院内侍

咲そむる宿の桜の一えたよ春なしきに秋そしらるゝ

耽離擲去れ云五十首よみ侍りける中に

前大僧正慈弦

うき世に吉野の花もよ春の世に志るへの空に在明の月

状義れんとうませ侍ける

後宇多院御製

心はふかくこゝに廣沢のなかれは末もたえしとそ思ふ

前大僧正慈鎮

昔より鷲の高ねにすむ月の入ぬに入る人そかなしき

前大僧正道玄

みな人の心よりかはる山たかみ雲の月はなほみちたかり

百首御歌の中に

院御製

世を照す光をいつそかゝけけるかなへき法の灯

以何不求道安可待老といふ心を

慶政上人

いたつらに老を待すそかなしきことしもうて又くらすて

雑哥の中に　前大僧正慈鎮

はるかなる光は法の世をてらす月日清めより出

前大僧正良覚横川にて如法経かき侍りけるに

天長のむかしはるかにおもひやらるゝよしや

とて　前大納言為家

いにしへのあとをたつねてやよ川の松風までをとめらん

返し　前大僧正良覚

そのかみになりし昔をとめても猶いにしへの跡そゆかしき

光厳院かくれ給ひけるに二月十五日北山

おなし太政大臣のもとより桜の花の枝にさす

とをくなかくしこさえぬと思す仏よりは

雲かともはふ花を手向よむやかて侍りける

返すとて　北山入道前太政大臣女

あかなくにこさえぬとみえてはこさいはふの手向の花は雪

釈教の哥の中に

宗遵上人

あるしにかりあはうつらぬさちのひの本の法はおほすゝ

観勝寺にて理趣三昧おこなひける道

場にて花籠より紅葉のちりけれは読

侍ける　従二位為子

法の場におちつむ紅葉は山姫のそむるにしきの衣とやみん

式乾門院十三年に法事ありて法花の品々
唐本の一切経供養せられける時空に音楽
のきこえけるをよみ侍りける

慶政上人

法の場空に楽こそきこゆなれ雲にあまきる花やちるらん

極楽六時讃といふによみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

錦まて紫雲をもとにて握るは玉より庭にたまそ散る

女人往生を

後光明照院前関白左大臣

し浦にくちて捨ぬるあきを我もむなしく波をきるかな

不浄観の心をよめる

前参議教長

まよひあふ阿修羅とみれるうけておきても我身ならすといふそかなしき

雪山成道の心をよみて前大納言為兼許
につかはしける

法深禅師

ゆりふかき雪のみ山にはいりし道もあとこそなけれ分てたつねん

返し

前大納言為兼

たつねよる雪の山路はふかくともあさき心のまことをそ知る

釈教哥の中に

如宣上人

みしをふたゝひおもひし夏はわれなつかしき花あへこそ

従二位親子

心にかゝりてあはれなりける我身ともならへ山のはの月

誰をまちてさて涙とのこひ侍る時もとみて

よみ侍ける

慶政上人

匂ふとも色にへたてとなきさ様されは身ひとりみゝ哀とそ思ふ

百首御哥の中に

伏見院御哥

梅かえにかゝる人の匂ひそめてねまよひ風まへのむとみゆる

清歳ちるにまかりてよみ侍る

そのゝ花

くもなくかすみてさる玉の臺はちりもかゝるさ樹そ侍る

秋散乃哥の中に

前大僧正慈鎮

般若の臺にはなちあきて法花経を夏との

よりそゝきまかりて

風雅和歌集巻第十九

神祇歌

桜花あたにちるらんそらまてもうきさ世とおもはぬ人そなく
　此歌は賀茂明神の御歌となん
世中にすむ人のわさとふは我とたのまぬ人そなかりけ
　この歌は賀茂大明神の御歌となん
みさ山雲ゐるかたに出にし月のかけにてはしらはれ
世中の人のおもひはかりせいかにんのまてはまほ
　この二首は暦応三年六月の比法皇見
神木やましなる寺の金堂にうつりし也
　給ける時つきはしを行けるとなん
かはらて三笠の山をとられなはあめか下まて雑かの経さ
　これは春日の社の木すゑにかけし御
　せうそこにかく人の夢に大明神の御
　歌とて見えけるとなん
比叡山や小比叡の松風もやまぬ嵐をはらむとそ思ふ
　此は日吉の地主権現の御歌となん
有漏よりも無漏に入ぬる道なれはこれそ仏のみちにぬく
　この歌は後白河院熊野に御参詣三十三度に
なりける時ゆふ所にてつけはせ給

けるとなん

いつれも藝にまして神事にハ月のさハりもはゝからさ

れハ和泉式部くまのへ詣して参りけるに

にさハりに成て奉幣かなハさりけれハ

はれやらぬ身のうき雲のたなひきて

月のさハりとなるそかなしきとよみけれハ

そのけり其夜夢につけ給ひけるとなん

神祇と　　後伏見院御製

神路山内外の宮にやハらけし月ハくもらぬよを末とてそよ

建治百首哥に　　後西園寺入道前太政大臣

うこきなき国津まもりの神杉もちよともかハらぬ君か為をそ

河と　　太上天皇

まよひをも又あきらかにいさ川なかれすむ心ハ神のまにまに

たゝ無清浄正義輪なる來納し給ふ十

そなへ中に月と　　前太臣

やハらくる光そ三の玉くしけにかけしもかハらぬ秋の夜の月

神祇を　　院御製

神風にうき雲ちりもはらはれて天照す日のあきらけき世ハ

月五十首哥中に雑月と

後宇多院御製

こゝやとてすみけむ人のあとならねは今もかはらぬ月の下森

社頭月と　荒木田氏之

よむ月をいくよせふりぬいすゝ川常世なる清きなかれは

君か代をいのる神宮にて立春九日にあり

度会家行

かくれ井とさへ宗水よくこそあてけふあらむこゝろまさり

神祇と　度会延誠

世をとへ波とをつゝしき久堅のあめよりおちすかみのみ

三河かしよみゆつめありきこゆとて二十六番

まつひて大神宮にふしてまつるとて　俊成

うちまけこゝろしてとやけるにふるひく辞や

かれとこゝろおそや作るとて歌合みちにさ付

てつかはしける　西行法師

藤波をみもすそ川にせきいれて百枝の松にかけよとそ思ふ

勝負さたまりつきて侍りし歌合のおくに

かき付て侍りける　皇太后宮大夫俊成

藤波もみもすそ河の末なれはしつえもかけよ松のもゝ枝

題しらす　荒木田房継

神てあひおさきて祈む神ちふみきめくるとつかへてそ鶴

度会朝棟

くもりなき千木ハ内外にかはれともひとつ心は世の神かき

賀茂遠久

久堅のあまの岩戸のこれそこの神代のやまとみやまもる

鴨祐光

君か為みたらしかはりて清き川のなかれすむかとみゆるき

賀茂惟久

くもゐまの岩ねの苔緑ふかし うこきなき世と神もしるらむ

雑哥の中に

前大納言為兼

あひおひても神そしるらんいくよへし風とのこせる住吉の松

津守国夏

我君とまもりの神しかまれたる千世のまもりハよし吉の松

神祇哥の中に

後光明照院前関白左大臣

おほそらの一葉の松のかけのまもりハ神の恵も千世やへぬへき

京極前関白家肥後

春日社にまいりて月の夜すからねとといひて

よみ侍ける

三笠山その氏人のかすなれはゆくゑもたのもし神やみるらん

雑哥の中に

前太政大臣

それとなく思へはしるもみかさ山さして神とそ思ひたのまむと

春日社へまいりてよめる

刑部卿頼輔

教へてあめか下にふりぬる道とぞ教なのまもる三笠の山

寛治百首哥に山家松を

前大納言為氏

御代にあふ神代もさぞな三笠山おなじ緑のまへの松原

建武のころ雑御哥の中に

後伏見院御哥

さつきやみ月は末まで仏の露にさそはれし世の世にも似ぬ

神祇を

今上天皇

たのむまと二なけまは露のひとつ流によするとぞ思ふ

百首哥に

わかれてのちもかはらぬ露にかはりぬ世とすまむ世とぞ思ふ

社頭月を

前太政大臣

今までは御まつりて月とゝ三笠山あまて光よ末をてらさむ

春日社にて月をよみて

中臣祐春

我心ありけるぞ三笠山かゝりまつ月を見んかこそめ

祖父祐家自筆の記をよみて

中臣祐梃

みしとかは昔に似ぬとも神の御代のことなれ

文治六年女御入内の屏風の哥春日祭の社

祝儀と　　　皇太后宮大夫俊成
春日も光ことにや照まさん玉くしけみかさの山にゆふ
神祇と　　　紀俊文朝臣
榊葉やちのかみのつきせぬ神とさけき日ままて
日本紀をそへてよみける
前大僧正慈勝
あさて世をみるの白妙にきこの枝まてぬさそけたる
猶光俊
うちやぬさ淺ふ江にとしめしそ神代とうけし初ふりまる
春日若宮神主になりてよみける

中臣祐臣
かすか山おほしはしめし神のましにかさくる神もこそわすれさらめ
雑哥よ　　　賀茂教久
世をわたる心を神やうけぬらし老らくまて我そいのれる
天台座主にて侍ける時日吉祭に日祐道（通）
長かりとよりかのかたのとを送りて侍る
まてし　　　入道二品親王尊円
久かたのあまつ日吉の神さかり月のみかけを光そへまし
神祇と　　　祝部成国
生れきてつかふることも神のよに契ある身とおもひたのまむ

前中納言為相

代々とてあふく日吉の神さへに心のぬさをかけぬ日そなき

寄鏡神祇といふことを

右大臣

九重にあまてる神のかけうつる鏡は今もくもりなし

権大納言公蔭

天照とみけるともつきてます鏡つかへまつる世のひかりをかゝめや

継体にましてゝ三の山は法の神とそあかめてまつる

とてよみ侍ける　源有長朝臣

ねかふ月にそふ影とてしんよみて鏡ようつさんと

暦応元年法の心ありてその後よゆりて志

つめ侍りて後日吉社に参りてよみける

高階師直

あまくたりし神のめくみは世またなかれはかはらぬ代々の

日吉社に奉てまつりける百首歌中に

皇太后宮大夫俊成

山桜ちる光をやはらけてこの世にはさるもすやまさん

雑歌中に

前大僧正慈鎮

日本は神の御国ときゝしよりいますかことくたのむとそ思

嘉元百首歌たてまつりける時神祇

後西園寺入道前太政大臣

天津そらまつ風ふとわかまてもゆたかなるかな

枕詞心を

後宇多院御哥

あま川のさくふの風し波といへひてそ我おしへし国はおさまる

風雅和歌集巻第二十

賀哥

百首哥たてまつりし時

民部卿為定

うこきなき君をとよにみかさ山やまちのまさきの今はかはらし

慶賀の哥とてよめる

皇太后宮大夫俊成

ゆふしてや松は千とせのいろさしと君か代の人のためしとすらん

題しらす

俊頼朝臣

たまよとの濱のまさこを君か代の数にとられよやと浪もよすらん

大蔵卿行宗

君か代の数はさゝれし千世をへて小松か枝に猶やのこらん

前参議経盛賀茂社にて歌合し侍りけるに
祝の心を
従三位頼政

おのえをこゆす仙人のくりさそ見ゆるとも君かよはひは

寛治百首歌中に寄日祝といふことを
冷泉前太政大臣

みかさ山さしのほる朝日影こそもくもりなき万代の春

山階入道左大臣

岩戸出し日影はいつもくもりなくはかりしられぬ御代とてらさん

花山院前内大臣

我君の大和島ねと出る日かけのかけてもあふくひかりや

寄日心を
大江宗秀

あめか下あまねくわかる日のもとにやまともわかぬ君か恵よ

山月を
前大納言俊定

我君へ八千世のおほ山の殊の月くもりぬ影は君かなかめを

嘉元百首歌に祝
後山本前左大臣

くもりなくてらしのそめる君か世は月日とゝもにつきしとそ思

寄月祝と
喜多大夫實友

くもりなきさ雲のそらに出る月やおほ万代の鏡なるらん

叙爵の後望とさくりて云よみ侍けるに

禁中月といふことを

二品法親王慈道

わか国に雲ゐの月もあきらけき御代の光に身を照らさ

延喜御時御屏風の歌

貫之

ゆかしくも千年を祝ふ百とせの春のはしめと鶯ぞなく

正月のはなの取のらふやまてそかな

能宣朝臣

時しもあれ春の初めにおひそむる（とし）松は八千世のいろもそへみえ

人の家に子日の小松をうへて侍るに書つけ

まつのちとせもむすひつけ侍

清輔朝臣

雪ふかき色も候よ姫小松二葉なるや千世をかそへん

清慎公七十賀屏風の歌

能宣朝臣

ちるとても惜まさりし桜花も風まつへくそつらふてなか

長元六年内裏にて翫新成桜花といふ

ことを

権大納言長家

ときぬ松もなにか万代と見えしに白きもをしきけれ
廉義公賀し侍りける時屏風の絵によみて
こゝに　　中務
わきてふくかせとこそいへ桜ちる春やはなてさらまし
寛治元年三月二日西園寺へ御幸ありて
翫花といふことを講せられけるに
前大納言為氏
千とせふるみちと今はしりてもゝさかゆく春そひさしき
山階入道左大臣
君か代はおほそらひかりに桜年ことにあかすをりてこそみん

右近大将道忠
桜花千とせの春にをりにあひて君かと見れはいにしへかなん
正嘉二年西園寺にて一切経供養せられ
けるつきの日翫花といふことを講せられけるに
深心院関白前左大臣
きのふよりいたくして白へ桜にも君か千とせの春を契りて
山階入道左大臣
君か為めくみもかけゝるもなれは千世のみゆきの春を祝し
後深草院少将内侍
桜花おもふ千とせみゆれしとやきのふのみゆきの春に年へん

入道前関白太政大臣

夜と
行末を松の緑に契りてそ末たくはれ宿の栄は

文永八年正月叙位に一級ゆるされて侍ける
に内裏にて禁庭松久といふことを講せられ
けるによみ侍ける　従二位隆博

色かへぬ雲ゐの松によろつ代の一志かはらぬ春風をそきく

嘉元二年伏見院に三十首歌たてまつりける時
社頭祝　円光院入道前関白太政大臣

大原や神代の松にならひみせり千世守りと祈るこゝろなるへき
七千契しけるふへくの言をとりて侍れは

よみ侍ける　祝部成仲

君か代のいはふとすれはみやおりそ老木に花の咲くらす

小松内大臣家にて菊合し侍りけるに人にかはり
てよみ侍ける　建礼門院右京大夫

えしらぬ宿のあるしのこれもとも小老せぬ秋そさかん

前中納言通房二てひ沸になりあまる
こと中つかうすとて　康資王母

くもりなく千年の数もそひぬへし二てひさつ紫藤の松

寛治百首歌の中に寄社祝
土御門院小宰相

神路山百枝の松もさらに又幾千世君に契りおくらん

建仁元年二月歌合に寄神祇祝といふことを

後京極摂政前太政大臣

君か代の長きためしとこれやみむ河の岸の松もいく代をかさす

文保三年百首奉りける中に

民部卿為定

九重のみかきは幾代呉竹のおひそふ数は千代の数かも

建武元年中殿にて竹有佳色といふことを

と講せられけり

前大納言為氏

百敷やおひそふ竹の数ことにかはらぬ毎の色そみえける

後伏見院立坊のよしめしつる遊義門院より

あまたのかそへあてまつるまてこれを

よろつ代の竹のいまとみまなくしと女房の中にお

ほせことありけれは代々のうたにかきつけ

侍ける

従二位為子

美秋の家為名そふ時に年をへて萬代ちきる竹そ変

法性寺入道前関白家にて鶴契遐年と

いふことをよみ侍ける

宮内卿永範

菊の門に千とせまてとや契るらんかさしを揃て君かためかは

續古今竟宴歌

冷泉前太政大臣

昔みし三つの玉を今すへに光をそふるわかの浦波

和哥所にて皇太后宮大夫俊成に九十賀たまはせける時

後京極摂政前太政大臣

もゝとせにとゝせたらぬ苔の袖ふるのしんやけふみかきあらん

七十賀の後よみ侍ける

祝部成茂

老らくまて七そちとなりてもあかすや和歌の浦につくさん

宝治二年後嵯峨院に百首歌奉りける時

松山を

藤原光俊朝臣

世を照すひかりをそふるこの松の家の末まて栄えさかゆるみかけにしたかひ

百首歌の中に

院御製

水上のさためし末にあふみなる世のみすそ川のひとつ流れ

寄国祝を

前太政大臣

藤原やゝ道の風のとをく民の草葉もともになひくへ

河といふ事を

前太政大臣

くれ竹の色になるてふ河竹も十かへりまても君か代の数

雅方小　参議定忠

君とのりの道をたかへさりけりまつ萬葉集をよましめ

後鳥羽院の時五人に二十首をさためて

百首にうたさせけり時號

如願法師

あひかたき御代にあふみの鏡山くもりなきよと人もみるらん

天禄元年大嘗会悠紀方屏風の歌近江

國勢多の橋をよめる

兼盛

こゝろさし橋をさへとゝめつる東路のせたの長橋ともとこしなへに

承保元年大嘗会巳日退出音声楽急

ふるせ川をよめる　前中納言匡房

みつき橋ふみならせとも橋に駒のあしもとも風情を後世に

同じ屏風の歌人の家の門田によみける

君か代はいくそのかみの門田にいくそたひもとをさむらん

君かへりみちあるかへ

かくきみか代におさまれ日をまたせともそれ

寛治元年大嘗会屏風に小松原のそれ

なかゝりそのためにすむ人の

小松原下ゆくみちのたをりてとせの数をむすひつれ

仁安元年大嘗会辰日退出音声音羽山

皇太后宮大夫俊成

吹風は枝もならさて万代とよふこゑのミそたえぬ山

正応元年大嘗会主基方屏風に素賀

良川岸菊盛開所人汲下流

正二位隆博

汲人のよはひもはるか長月やふる此川の菊乃下水

永仁六年大嘗会悠紀方屏風長沢

池端午日採菖蒲

前大納言俊光

君か代のなかきためしよ長沢の池のあやめハけふそひくなる

同し大嘗会悠紀方屏風増井納涼

乃人あり

正二位隆博

涼しさを増ぬる清水のむすふ手に見えんかけもいく万代の数

暦応元年大嘗会悠紀方神楽哥

近江国鏡山

正二位隆教

岩戸明し昔さへ鏡の山にうつりまてらすやしき

あきらけき世ハ

以下
3丁
白紙